

1988

芝宮遺跡群

下 芝 宮 遺 跡

長野県佐久市長土呂下芝宮遺跡発掘調査報告書

昭和63年3月

長野県佐久市教育委員会



芝山遺跡群下芝山遺跡航空写真（上が北）



群 2 新庄原出土土器



H2号住居址炭化材出土状況(南より)



H2号住居址カマド(南より)

例 言

- 1 本書は、昭和62年12月3日～12月23日において発掘調査した、長野県佐久市大字長土呂宇下芝宮に所在する芝宮遺跡群下芝宮遺跡の調査報告書である。
- 2 本調査は、佐久建設事務所の委託を受け、佐久市教育委員会が実施した。
- 3 本調査は、林幸彦・羽毛田卓也を担当者とし、佐久市考古学会有志を調査員として、地元他多数の方々との協力を得て実施した。
- 4 本書に挿入した遺構の実測図作成には、羽毛田・井出百合子・橋詰信子・臼田俊保・内藤治伸があたり、遺物の実測図作成は、羽毛田・井出・堺益子・高杉昌子・臼田・内藤が担当した。また遺構のトレースは、市川香里が、遺物のトレースは羽毛田他が行った。また掲載した写真は羽毛田が撮影した。
- 5 本書の執筆・編集は、羽毛田が行い、林が校閲した。
- 6 本書の資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。
- 7 発掘調査にあたり、御指導・御協力をいただいた方々に、記して厚くお礼申し上げます。

(順不同、敬称略)

白倉盛男、笹沢浩、神村透、金井塚良一、桐原健、前原豊、川島雅人、小坂井孝修、花岡弘、丸山徹一郎、臼田武正、寺島俊郎、近藤尚義、馬場長光、関川尚功、川上元、木下亘、堤隆、田中正二郎、島山俊彦、高村博文、福島邦男、羽毛田伸博、藤沢平治、島田恵子、石崎俊哉、由井茂也、黒岩忠男、井出正義、宮下健司、森島稔、塩入秀敏、児玉卓文、上村安生、岡村渉、百瀬長秀、市沢長秀、小平和夫、竹内稔、沢田正昭、肥塚隆保、郷道哲章、森泉かよ子、三石宗一、小山岳夫、新井真博、矢島宏雄、佐藤信之、山根洋子、矢口忠良、神沢昌二郎、直井雅尚、熊谷康治、高桑俊雄、関沢聡、小林康雄、長崎元広、高林重水、鶴飼幸雄、山下誠一、小林正春、桜井弘人、諏訪間順、諏訪間伸、鳥居亮、片山徹、佐合英治、掘田雄二、田村孝、西沢浩、坂井美嗣、翠川泰弘、小林真寿、古郡正志、小島純一、清野利明

凡 例

1 遺構の略称

H→古墳時代住居址、F→掘立柱建物址、D→土坑、M→溝状遺構

2 遺構・遺物の縮尺は原則として次のとおりであり、図中にスケールを付した。

1) 遺構 住居址・掘立柱建物址→1/80、土坑→1/60、カマド→1/30、溝状遺構→1/100-1/80

2) 遺物 須恵器・土師器→1/4、石製品→2/3

3 挿図中におけるスクリーントーンは下記のものをあらわす。

1) 遺構 断面→斜線、カマド→点、柱痕→点

2) 遺物 須恵器断面→点、内面黒色研磨→点

4 遺構の海拔標高は、各遺構ごとに統一し、水系ラインに水系標高として明記した。

5 重複遺構は、上端のみ実線で表示し、遺構内の擾乱は細い実線で表示した。

6 写真図版中の遺物の縮尺は、土器が1/3で他は1/1とした。

7 写真図版中の番号は、挿図番号と対応する。

8 遺物番号は簡略化し、例えば第14図2は14-2とした。

9 各一覧表の数値について、不明は一、現存値は〈 〉、推定値は()とした。

10 遺物の実測は、第三角法を用いたが、適宜第三角法の応用で作図したものもある。

11 遺物胎土の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務所・財団法人日本色彩研究所色表監修 1970 『新版 標準土色帖』の表示に基づいて示した。

12 挿図中の略記号は次のとおりである。

P→ピット、S→石、土層断面図中のP→土器、T→炭化材

本文目次

例言

凡例

本文目次

第I章 発掘調査の経緯

1 調査に至る動機	1
2 調査の概要	7
3 調査日誌	7
4 発掘調査の方法	8

第II章 遺跡の位置と環境

第III章 層序

第IV章 遺構と遺物

1 住居址

1) H1号住居址	13
2) H2号住居址	19

2 掘立柱建物址

1) F1号掘立柱建物址	35
--------------	----

3 土坑

1) D1号土坑	36
2) D2号土坑	36
3) D3号土坑	36
4) D4号土坑	37
5) D5号土坑	37
6) D6号土坑	38
7) D7号土坑	38

4 ビット群

5 溝状遺構

1) M1号溝状遺構	40
2) M2号溝状遺構	43
3) M3号溝状遺構	43

4) M4号溝状遺構	44
5) M5号溝状遺構	44
第V章 総括	47
引用参考文献	

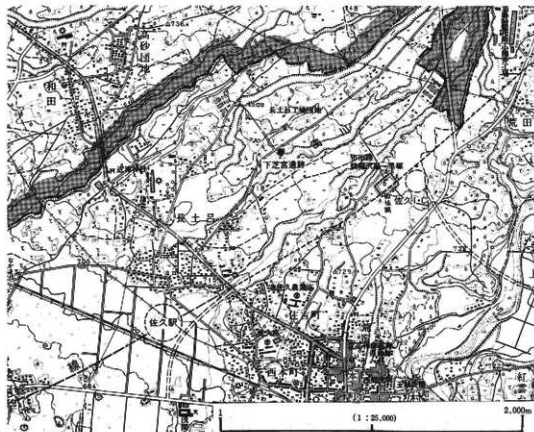
第I章 発掘調査の経緯

1 調査に至る動機

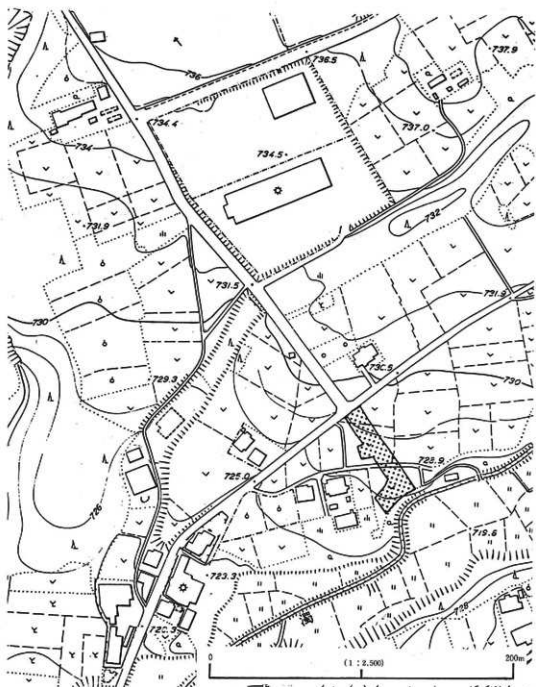
芝宮遺跡群は、佐久市大字長土呂・小田井に所在し、浅間山に源を発する濁川の浸蝕による田切地形の北側の標高720m～760mの段丘上に展開する大遺跡群である。下芝宮遺跡は、西進してきた濁川が南西へやや流れをかえる北側の緩かな南西斜面上に位置する。本遺跡北側には、昭和54・55・57年度に調査の行われた芝宮遺跡が存在する。

今回、佐久建設事務所が行う道路改良事業（路線名141号線）に伴い、同事務所と佐久市教育委員会とで協議の結果、本遺跡の破壊を余儀なくされ、緊急に記録保存する必要が生じた。そこで佐久建設事務所より委託を受けた佐久市教育委員会が主体となって発掘調査する運びとなった。

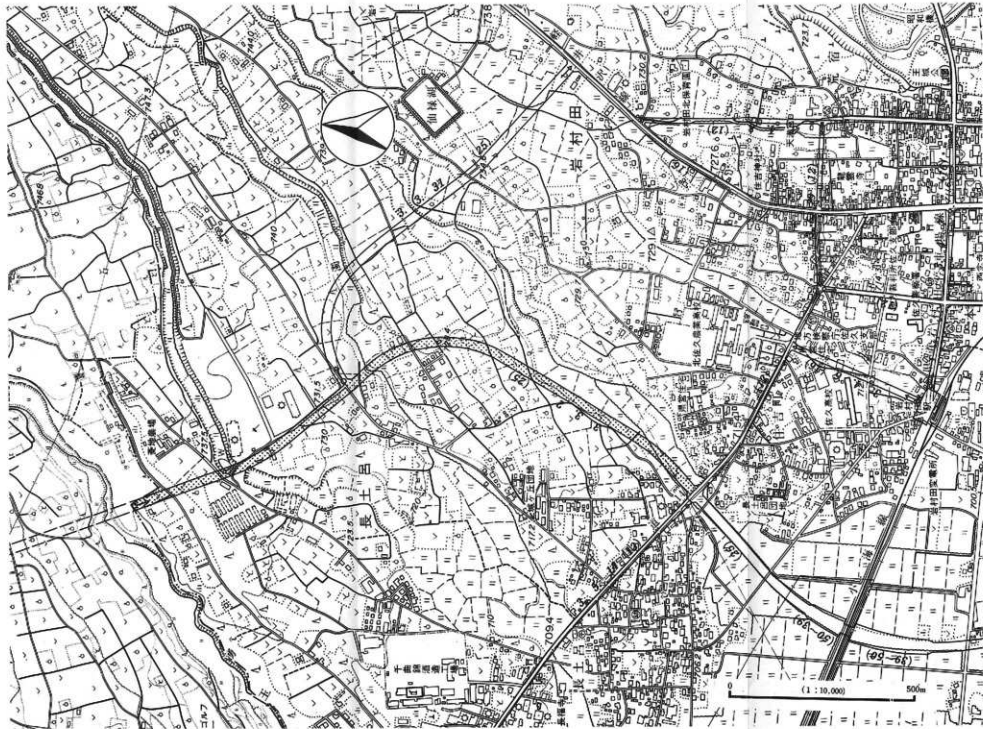
（事務局）



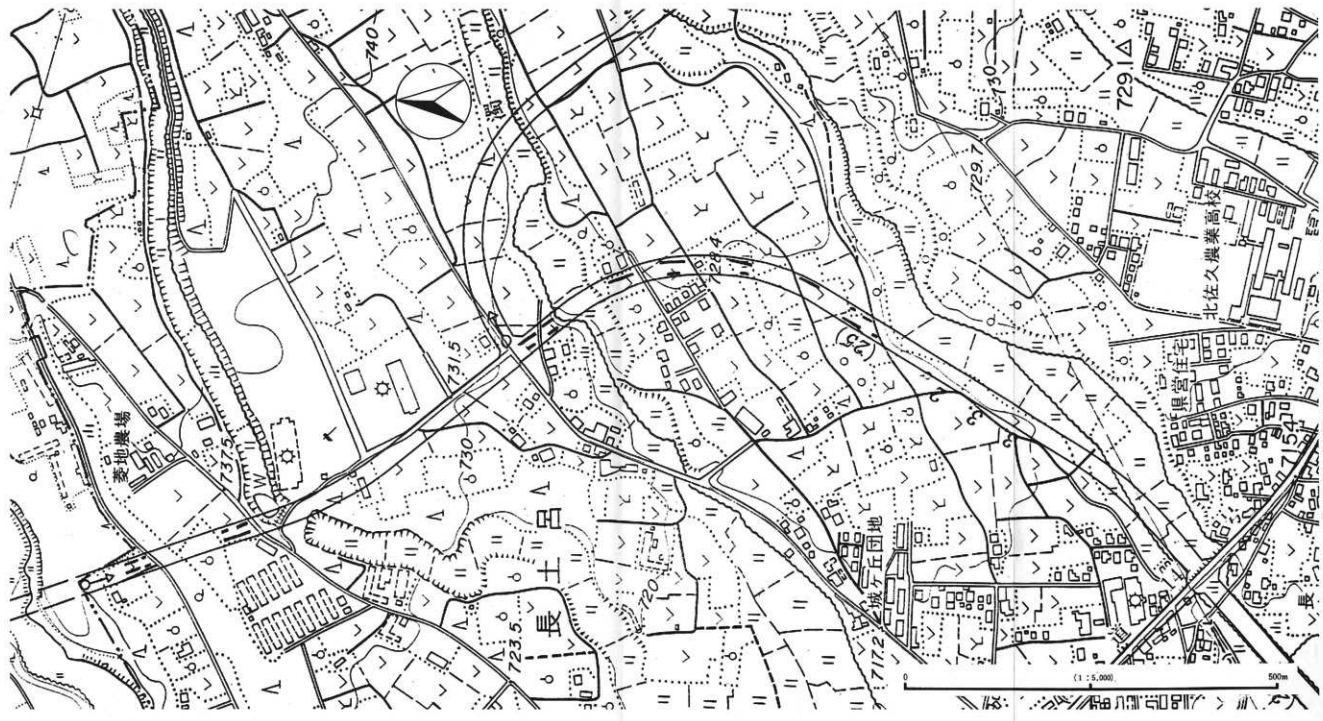
第1図 芝宮遺跡群下芝宮遺跡位置図 (1:25,000)



第2図 下芝宮遺跡位置図 (1:2,500)



第3頁 國庫院111號地台全圖(長谷川谷正區) 改爲軍需令林圖(1:10,000)
 (此圖重訂測量機關圖上訂)



第4図 佐野地区地形図 (1:5,000) 測量所トランプ

2 調査の概要

遺跡名	芝宮遺跡群下芝宮遺跡
所在地	長野県佐久市大字長土呂字下芝宮812-4他
発掘期間	昭和62年12月3日～昭和62年12月23日
整理期間	昭和62年12月5日～昭和63年3月31日
調査団の構成	
〔事務局〕	
教育長	大井昭二
教育次長	柳沢昇一
社会教育課長	木内 捷
社会教育係長	小平 実
社会教育係	白石賢次、林 幸彦、高橋和敬、萩原一馬、羽毛田卓也
社会教育指導員	根津恵美（昭和63年1月退任）、三石和子（昭和63年2月就任）

〔調査団〕

調査担当	林 幸彦、羽毛田卓也
調査主任	佐々木宗昭
調査員	大井今朝太
調査補助員	井出百合子、大井恵美子、柳益子、高杉昌子、橋詰勝子、橋詰信子、三石和子
参加者	浅沼ノブ江、池田和明、市川香里、市村美咲、臼田俊保、遠藤しづか、金森治代、木内一也、高地正雄、高木久江、高見沢久美子、田嶋和美、田中夏江、内藤治伸、並木ことみ、橋詰けさよ、星野良子、細萱ミズ、山崎明、山崎平八郎、渡辺久美子

3 発掘調査日誌

- 昭和62年11月25日
調査区域の確認と打ち合せを現地にて行う。
- 昭和62年12月3日
テント設置、機材の搬入を行う。
- 12月3日～12月5日
重機による表土削ぎ、ダンプによる表土移動。
- 12月3日～12月7日

遺構の確認のための精査作業を行う。

○12月4日

土坑・溝状遺構の掘り下げを開始する。

○12月5日～6日

海拔標高原点の設置とグリッドの設定を行う。

○12月7日

前日降った雪のため雪の排除作業を行う。室内にて遺物区分作業を行う。

○12月8日

住居址の掘り下げを開始する。実測図の作成、写真撮影を開始する。

○12月12日

焼失住居址の掘り下げを開始する。覆土の搬出を開始する。

○12月14日

前日降った雪のため雪の排除作業を行う。(積雪量20cm)

○12月18日

焼失住居址以外の遺構の調査が終了する。

○12月23日

全ての遺構の調査が終了する。機材の搬出、テントの撤去を行う。

○62年12月7日～63年1月31日

土器洗い、遺物註記、焼失住居址覆土ふるいを行う。

○63年2月1日～3月10日

遺物復元、遺物実測、図面修正、遺構・遺物のトレースを行う。

○2月20日～3月

原稿執筆・編集作業を行う。

4 発掘調査の方法

本遺跡の調査を実施するにあたり、基本的な調査方法を次のような確認事項をもって実施した。

- 1 調査はグリッド方式で行う。発掘区全体を5m×5mの方眼に組み、東西ラインを数列とし、東より1・2・3……、南北ラインは南からあ・い・う……の順で番号をつけ、各グリッドの南東交点をそのグリッド名とした。
- 2 住居址は原則として4区に分割し、その南北ラインで土層セクションを実測した。
- 3 カマドは4分割して調査を行い、土坑は2分割して調査を行った。

第II章 遺跡の位置と環境



第5図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)

芝宮遺跡群下芝宮遺跡は本遺跡群の南西端に位置する。本遺跡群は浅間山の山腹に源を発する濁川によって形成された田切地形の北側に帯状に広がる大遺跡群である。付近一帯は浅間山南山腹より流れ出た大小の河川により、放射状に南下する数十本の大小田切が発達した田切地形で、その田切に沿って数々の遺跡が帯状に展開している。特に佐久市と小諸市境一帯には大田切がよく発達している。

本遺跡付近には、昭和59年から本年度までの調査で古墳時代から平安時代にかけての大集落が検出された鉾師屋遺跡群(1)、曾根城遺跡(2)、昭和46年度調査の北近津遺跡を有する近津遺

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	佐分No.	遺跡名	時代					備考
			縄	弥	古	奈	平	
1	3	鉤師屋遺跡群	○	○	○	○	○	鉤師屋遺跡Ⅰ・Ⅱ(59、61)、前田遺跡(60、61、62)
2	4	曾根城遺跡	○	○	○	○	○	
3	6	近津遺跡群	○	○	○	○	○	北近津遺跡(46)
4	29	西近津遺跡群	○	○	○	○	○	西近津遺跡(46)
5	7	周防畑遺跡群	○	○	○	○	○	周防畑A・B遺跡(54・55)
6	8	芝宮遺跡群	○	○	○	○	○	芝宮遺跡1・2・3(54・55・57)、今回調査
7	9	長土呂遺跡群	○	○	○	○	○	
8	541	曾根新城跡						○
9	45	新城遺跡	○	○	○	○		
10	38	下蟹沢遺跡	○	○	○	○		
11	11	跡坂遺跡群	○	○	○	○		
12	10	栗毛坂遺跡群	○	○	○	○		柳田遺跡(58)
13	41	琵琶坂遺跡群	○	○	○	○		琵琶坂遺跡(55、60)、上直路遺跡(60)
14	42	中久保田遺跡	○	○	○	○		
15	43	西赤座遺跡	○	○	○	○		
16	44	上岩子遺跡					○	
17	52	岩村田遺跡群	○	○	○	○	○	六供後遺跡(55)、新町遺跡(60)
18	51	石並城	○	○	○	○	○	
19	41	王城	○	○	○	○	○	54年
20	39	円正坊遺跡群	○	○	○	○	○	清水田遺跡(53)、円正坊遺跡(59)

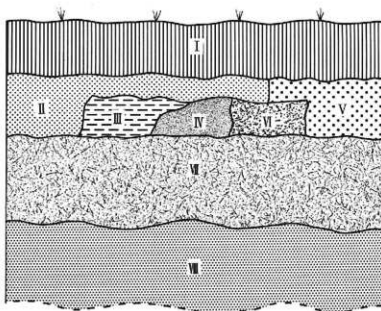
跡群(3)、昭和46年度調査の西近津遺跡を有する西近津遺跡群(4)、昭和54年度に調査された周防畑A遺跡と昭和55年度に調査され弥生時代後期の円形周溝墓が検出された周防畑B遺跡を有する周防畑遺跡群(5)、昭和54・55・57年度に調査した本遺跡北側の芝宮遺跡を有する芝宮遺跡群(6)、長土呂遺跡群(7)、曾根新城跡(8)、新城遺跡(9)、下蟹沢遺跡(10)、跡坂遺跡群

(11)、昭和58年度に調査の柳田遺跡を有する栗毛坂遺跡群(12)、昭和55・60年度に調査の琵琶坂遺跡と昭和60年度に調査され弥生時代後期の銅鏡15点が出土した上直路遺跡を有する琵琶坂遺跡群(13)、中久保田遺跡(14)、昭和61年度に調査の東赤座遺跡を有する西赤座遺跡(15)、上岩子遺跡(16)、昭和55年度に調査の六供後遺跡と昭和60年度に調査の新町遺跡・前藤部遺跡を有する岩村田遺跡群(17)、昭和60年度に調査され古墳時代の集落と中世の土坑群・竪穴状遺構が検出された大井城跡(18・19)、昭和53年度に調査の清水田遺跡と昭和59年度に調査の円正坊遺跡を有する円正坊遺跡群(20)などが存在する。これらの遺跡・遺跡群は8と16を除くとその全てが、各時代にまたがる複合遺跡である。なお本遺跡有する芝宮遺跡群も縄文時代から中世までの複合遺跡である。今回の調査では縄文時代と古墳時代・中世以降の遺構が検出された。

さて、これらの古代集落の生活を支えたものは、やはり稲作と考えられる。集落群の立地場所の現在における土地利用状況を見ると、一部の例外を除くと荒地・畑地ばかりである。そんなことから以前より注目されていたのが田切である。田切は河川の侵蝕作用によって形成された地形である。現在も田切の底面に大小河川が流れているものが少なくなく、水田耕作が営まれているものがほとんどである。このことを考えると、田切の段丘面に集落が営れ、田切の底面に水田が営れていたと考えられる。今後、何らかの機会にめぐまれ、この田切の底面を調査されたならば、この問題も解決されるであろう。

下芝宮遺跡は田切によって形成された台地の緩やかな南西斜面上に存在する複合遺跡で、濁川川との比高は8.4mを測り、南辺は垂直に立ち上がる断崖となっている。この断崖面において幾層もの火山噴出物(火山灰・火山砂・軽石・火山砕)の堆積を容易に観察することができる。また本遺跡北側より巾2mの小田切と南側より沼状の湿地跡が検出された。

第Ⅲ章 層序



第6図 層序模式図

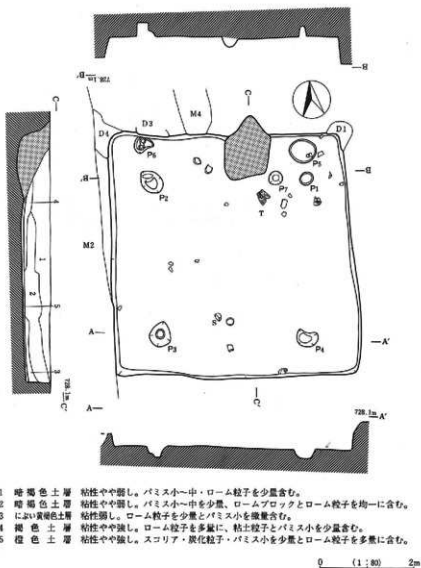
下芝宮遺跡は、海拔標高728m～729mを測り、南西方向に向ってやや不規則に傾斜する。基本層序は、調査区東側の全側面と南側面の中央部において実測した。

第Ⅰ層は、耕作による影響下で成立した粘性がやや弱い黒褐色土、第Ⅱ層は、粘性が弱くパミス小を少量含む黒褐色土、第Ⅲ層は、粘性が弱くパミス小を微量含むにぶい黄褐色土、第Ⅳ層は、粘性が弱く、パミス小を少量含むにぶい黄褐色土、第Ⅴ層は、粘性がやや弱く、パミス小とローム粒子を少量含む褐色土、第Ⅵ層は、粘性がやや弱く、パミス小を少量とローム粒子をやや多量に含む黄褐色土、第Ⅶ層は、パミス大～小を多量に含むローム主体の明黄褐色土、第Ⅷ層は、パミス大～小と砂礫・スコリアを多量に含むにぶい黄橙色土である。

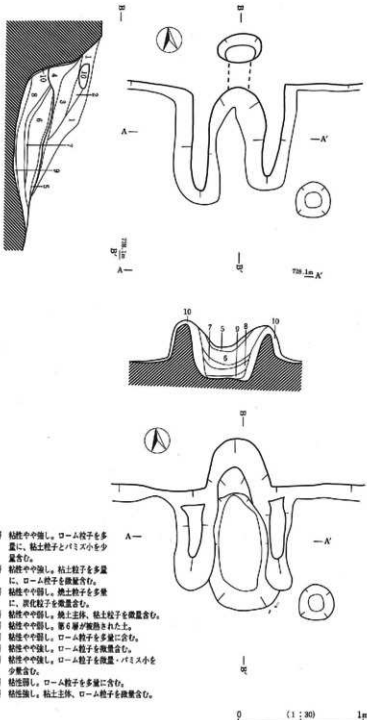
第IV章 遺構と遺物

1 住居址

1) H1号住居址



第7図 H1号住居址実測図



第8図 H1 居住層址カマド実測図

H1号住居址は、調査区南側よりやや中央寄り、か・き一4・5グリッド内に位置し、全体層序第Ⅶ層上面において検出された。また、北東隅をD1号土坑に、北西隅をD2号・D3号・D4号土坑に、西側壁をM2号・M3号溝状遺構によって破壊される。

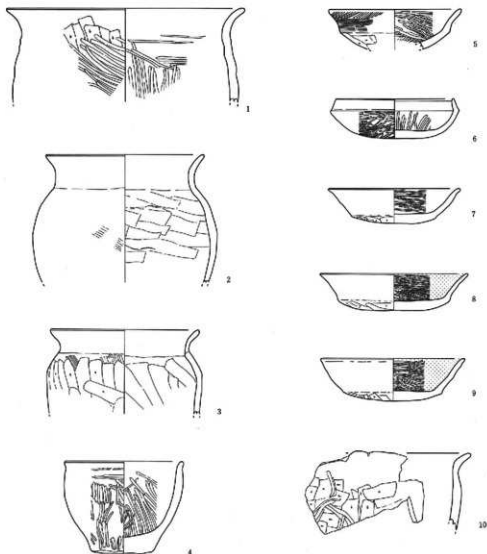
平面形態は、南北515cm、東西は現存で513cmを測り、方形を呈している。主軸方位はN-1°-Wを指す。

覆土は4層に分割された。第1層は粘性がやや弱く、バミス小～中（径1mm～5mm）とローム粒子を少量含む暗褐色土で、第2層は粘性がやや弱く、バミス小～中を少量・ロームブロック（径1cm以下）とローム粒子を均一に含む暗褐色土、第3層は粘性が弱く、ローム粒子を少量とバミス小（径1mm～2mm）を微量含むにぶい黄褐色土、第4層は粘性がやや強く、ローム粒子を多量・粘土粒子とバミス小を少量含む褐色土である。なお、第2層と第3層は、覆土の状態から、人為的に埋土されたと考えられる。

確認面からの壁残高は、31～61cmを測り、壁体は全体層序第Ⅶ層の明黄褐色土と第Ⅷ層のにぶい黄褐色土の一部を利用し、平滑で堅固である。床面は平坦で貼床が4cm～8cm程度認められた。貼床は、粘性がやや強く、スコリア（火山砕）と炭化粒子・バミス小・ローム粒子を多量に含む橙色土（第7図-第5層）によって貼られ、緻密で固く締まっていた。また壁際に周溝とは呼び難い浅い凹みの一部認められたが図示は控えた。なお、床面積は26.3m²を測る。壁はほとんど垂直に立ち上がり、各コーナーは直角を呈している。

ビットは、主柱穴4個（P₁～P₄）と貯蔵穴1個（P₅）・灰落とし1個（P₇）・その他1個（P₆）の計7個が検出された。P₁は径28cm×27cmで深さ25cm、P₂は径41cm×54cmで深さ32cm、P₃は径54cm×45cmで深さ27cm、P₄は径46cm×29cmで深さ23cmを測り、P₅はテラス部を持つ。主たる柱間はP₂～P₃で340cm、P₁～P₄で310cmを測り、東西に比べて南北がやや長くなっている。P₅は径50cm×57cmで深さ12cmを測り、検出位置と形態から、貯蔵穴と考えられる。P₇は径30cm×28cmで深さ8.5cmを測り、検出位置と覆土より、カマドの灰落としと考えられる。P₆は径35cm×41cmで深さ19cm（南）・25cm（北）を測る。柱痕らしきものが2個確認され、補助的な柱のビットと想定される。なお壁高がかなりあるにもかかわらず、入口施設に伴うビットは検出されなかった。

カマドは北壁中央よりやや東寄りで検出された。残存状況は良好で、径75cm×45cmの煙道が残存していた。規模は、焚口より煙道部まで152cm、袖部の巾92cmを測る。現存する東側の袖は、長さ85cm・巾34cm内外・高さ25cm～21cm、西側の袖は、長さ90cm・巾35cm内外・高さ21cm×22cmを測る。覆土は4層に分割された。第1層は粘性がやや強く、ローム粒子を多量に、粘土粒子とバミス小を少量含む褐色土（住居址内覆土第4層に対応）、第2層は粘性がやや強く、粘土粒子を多量に、ローム粒子を微量含む黄褐色土、第3層は粘性がやや弱く、焼土粒子を多量に、炭化粒子を微量含む暗赤褐色土、第4層は粘性がやや強く、粘土粒子を微量含む焼土主体の暗赤褐色土で



0 (1:4) 5cm

第9図 H1号住居址出土遺物実測図

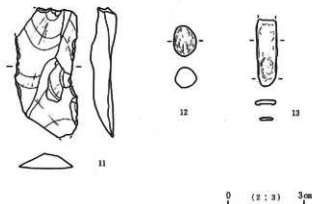
ある。第2層は覆土の状態より、煙道天井部の崩れ出した層と考えられる。カマドの構築状況は以下のとおりである。袖部は明黄褐色ローム層を基礎とし、ローム粒子を微量含む粘土主体の明褐色土（第10層）が貼られる。燃焼部・焚口は、床面より10cm程度掘り込まれ、粘性が弱くローム粒子を多量に含む褐色土（第9層）、粘性がやや強く、ローム粒子を微量、パミス小を微量含む暗褐色土（第8層）、粘性がやや強く、ローム粒子を微量含む黒褐色土（第7層）、粘性がやや弱く、ローム粒子を多量に含む明褐色土（第6層）、粘性がやや弱く、ローム粒子を多量に含む赤褐

第2表 H1号住居址出土遺物一覧表

発掘 番号	器種	法 量cm	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
9-1	甕	口径(24.8) 現高 10.0	直線的に立ち上がる胴部から外反する口縁に至る	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ 胴部内面ヘラナデ後ヘラミガキ	7.5YR6/6
9-2	甕	口径(16.6) 現高 13.6	球胴部より外反する口縁に至る	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面ヘケメ後ヘラナデ 胴部内面ヘラナデ	10YR7/4 10YR5/2
9-3	甕	口径(15.6) 現高 9.0	直線的に立ち上がる胴部から頸部で集約され、外反する口縁に至る	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面ヘケメ後ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	10YR4/4
9-4	鉢	口径(12.4) 底径 6.5 器高 9.3	平底より内彎気味に外傾し、口縁部は短く外反する	内外面ヘラナデ後ヘラミガキ	7.5YR5/4 10YR3/1
9-5	高杯 ①	口径(14.0) 現高 4.2	杯部中央に線を持つ 口辺部内彎気味に外傾	杯下部外面ヘラケズリ 上部外面ヘケメ 内面ヘラミガキ	10YR7/4
9-6	杯	口径 12.4 器高 4.2	丸底より内彎して外傾し、口辺は直線的に内傾する	口辺部内外面ヨコナデ 体部内外面ヘラミガキ	10YR5/2
9-7	杯	口径 13.8 器高 3.7 底径 8.9	丸底より直線的に立ち上がり、口縁部でやや外反する	体部外面ヨコナデ 底部ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ	10YR6/4
9-8	杯	口径(15.6) 器高 3.9 底径(11.8)	丸底よりやや外彎気味に外傾する	体部外面ヨコナデ 底部ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ 底部内面放射状文風ヘラミガキ 内面黒色	10YR6/4
9-9	杯	口径 15.0 器高 4.5 底径 13.0	丸底より直線的に外傾	体部外面ヨコナデ 体部・底部内面ヘラミガキ 底部外面ヘラケズリ 内面黒色	10YR7/4
9-10	甕	現高 8.1	口縁部鋭く外反する	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ 胴部内面ヘラナデ	5YR6/6

色土(第5層)の順に貼られて構築される。なお第5層の赤褐色土は、第6層の明褐色土が被熱されて変色したものと認識した。煙道の天井部は、ローム粒子を微量含む粘土主体の明褐色土(第10層)によって構築される。また煙道も第10層が一様に貼られていたと考えられる。第10層が貼られる以前の袖部は、東側袖が長さ83cm・巾28cm・高さ22cm・西側袖が長さ79cm・巾31cm・高さ29cm・高さ29cmの規模で造り出されていた。

遺物は、土器の甕・鉢・杯と須恵器の壺・蓋、石製品、鉄製品などが出土している。9-1～3・10は土器の甕である。9-1の甕は床面北東部の東側壁際より出土している。直線的に立ち上がる胴部と短く外反する口縁部を持ち、胴部の内外面にヘラミガキが施される。9-2の甕は北東部P,付近より出土している。球胴を呈し、胴部の外面に刷毛目調整の後単位不明瞭なへ



第10図 H1号住居址出土遺物実測図

ラ状工具によるナデ、胴部の内面にヘラナデが施される。9-3の壺は南側中央付近より出土している。直線的に立ち上がる胴部と短く外反する口縁部を持ち、胴部の外面に刷毛目調整の後ヘラケズリ、胴部の内面にヘラナデが施される。9-10の壺は北東部より出土している。胴部の外面にヘラケズリの後ヘラミガキ

第3表 H1号住居址出土遺物一覧表

挿図 番号	器種	原材	法 量cm			備 考
			長さ	巾	厚さ	
10-11	スタレバー	チャート	5.1	2.4	0.8	両側面に浅部調整を行って刃部を形成 縦長割片を利用
10-12	玉?	チャート	1.2	0.9	0.8	表面に研磨痕
10-13	鏝	鉄	2.6	<(0.8)	<(0.15)	先端部か

が施される。9-4は土師器の鉢でカマドの西側より出土している。平底より内彎気味に外傾する胴部とやや外反する口縁部を持ち、内外面にヘラミガキが施される。9-5は土師器の高杯と考えられ、北西部より出土している。鉢部中央に稜を持ち、杯部上半部の外面に刷毛目調整、下半部の外面にヘラケズリ、内面にヘラミガキが施される。9-6-9は土師器の杯である。9-6は床面南側の中央付近より出土している。丸底より内彎気味に外傾する体部と直線的に内傾する口辺部を持ち、体部との境に外稜を有する。また体部内外面にヘラミガキが施される。9-7は床面北東部P₁付付近より出土している。丸底より直線的に外傾する体部を経てやや外反する口縁部に至る器形を持ち、体部と口辺部の外面にヨコナデ、底部の外面にヘラケズリ、体部と口辺部の内面に横位のヘラミガキ、底部内面に放射状のヘラミガキが施される。9-8は南側壁際より出土している。丸底よりやや外彎気味に外傾する口辺部と体部を持ち、体部の外面にヨコナデ、内面に横位のヘラミガキ、底部の外面にヘラケズリ、内面に放射状の暗文風ヘラミガキが施される。

なお内面は黒色研磨がなされる。9-9は床面カマドの東側より出土している。丸底から直線的に外傾する口辺部と体部を持ち、体部の外面にヨコナデ、底部の外面にヘラケズリ、体部と底部の内面にヘラミガキが施される。なお内面は黒色研磨がなされる。他に須恵器壺の胴部片（ $\frac{1}{4}$ 残存）が出土しているが図示は控えた。10-11はチャート製のスクレパーで、両側面に浅部調整を行って刃部を形成している。なお混入遺物の可能性も考えられる。10-12はチャート製の玉、あるいは磨石と考えられ、表面に無数の研磨痕、あるいは使用擦過痕が認められる。10-13は鉄鏝と考えられる。なおカマドの南側の床面より炭化材が出土している。

以上より本住居址は古墳時代後期（鬼高期）に位置付けられる。

2) H2号住居址

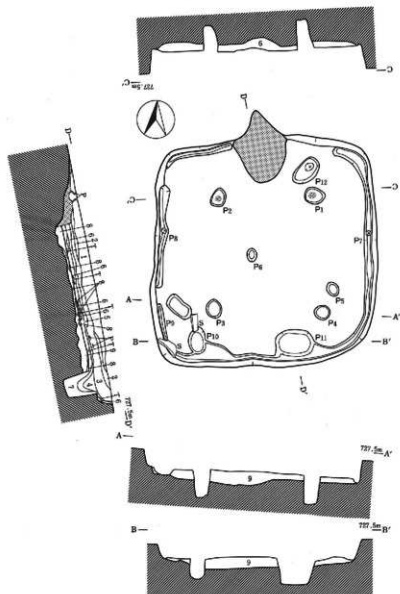
H2号住居址は、調査区中央、く・けー7・8グリッド内に位置し、全体層序第VII層上面において単独で検出された。

平面形態は、南北532cm、東西473cmを測り、隅丸方形を呈している。主軸方位はN-3°-Eを指す。

覆土は7層に分割された。第1層は粘性が弱く、バミス小（径2mm以下）とローム粒子を微量含む黒褐色土、第2層は粘性が弱く、バミス小とローム粒子を少量含む黒褐色土、第3層は粘性がやや強く、ローム粒子と炭化粒子を微量含む黒色土、第4層は粘性が弱く、ローム粒子を多量に、炭化粒子を微量含む暗褐色土、第5層は粘性がやや弱く、ローム粒子を少量・炭化粒子を微量含む黒褐色土、第6層は粘性がやや強く、炭化粒子を微量含む焼土主体のブロック状の赤褐色土、第7層は粘性がやや強く、ローム粒子・ロームブロック（径1cm以下）・バミス小・炭化材を多量に含む褐色土である。なお第7層は覆土の状態より、人為的に埋土されたと考えられる。また第7層中に炭化材と第6層が含まれている事より、埋土は住居址が完全に燃え切らない内に行われたと考えられる。

確認面からの壁残高は、25~49.5cmを測り、壁体は全体層序第VII層の明黄褐色土を利用し、平滑で比較的堅固である。床面はおおむね平坦で貼床と周溝が認められた。貼床は第8層の粘性がやや強く、焼土粒子とローム粒子・バミス小・炭化粒子を多量に含む暗赤褐色土と、第9層の粘性が弱く、バミス小~中（径5mm以下）を多量に含む明黄褐色土によって、5cm~30cmの厚さで貼られている。周溝は、カマドと西側壁の一部でとぎれる他は、巾8cm~44cm・深さ5cm内外の規模で全周している。なお、床面積は17.58㎡を測る。

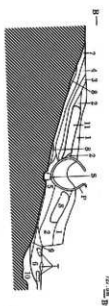
ピットは、主柱穴4個（P₁~P₄）、補助柱穴4個（P₅~P₈）、入口施設2個（P₉・P₁₀）、貯蔵穴2個（P₁₁・P₁₂）の計12個が検出された。P₁は径37cm×44cmで深さ63cm、P₂は径40cm×31



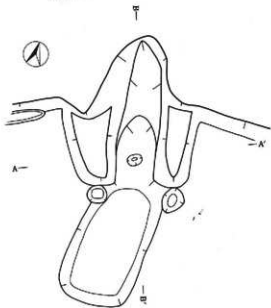
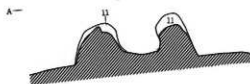
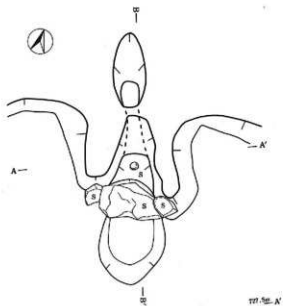
- 1 黒褐色土層 粘性弱し。パミス小とローム粒子を微量含む。
- 2 黒褐色土層 粘性弱し。パミス小とローム粒子を少量含む。
- 3 黒褐色土層 粘性やや強し。ローム粒子和炭化粒子を微量含む。
- 4 暗褐色土層 粘性弱し。ローム粒子を多量に、炭化粒子を微量含む。
- 5 黒褐色土層 粘性やや弱し。ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含む。
- 6 赤褐色土層 粘性やや強し。炭化粒子を少量含む。焼土主体。
- 7 褐色土層 粘性やや強し。ローム粒子・ロームブロック・パミス小・炭化材を多量に含む。人為的埋土。
- 8 暗赤灰色土層 粘性やや強し。焼土粒子・ローム粒子・パミス小・炭化粒子を多量に含む。
- 9 明黄褐色土層 粘性弱し。ローム主体。パミス小〜中を多量に含む。

0 (1:50) 2m

第11図 H 2 号住居址実測図

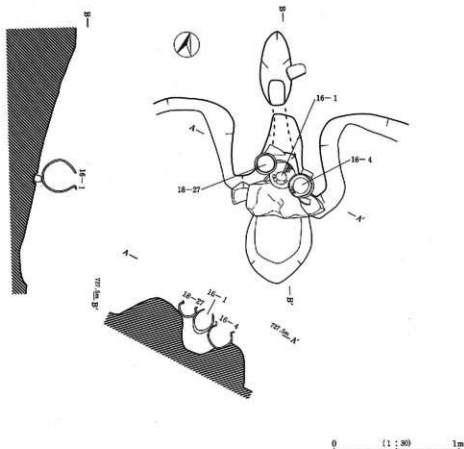


- 1 黒色土層
粘性やや強し。ローム粒子を微量含む。
- 2 黒褐色土層
粘性やや弱し。ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含む。
- 3 褐灰色土層
粘性強し。粘土粒子を多量に、焼土粒子を少量含む。
- 4 灰褐色土層
粘性強し。粘土粒子・焼土粒子を多量に、ローム粒子を微量含む。
- 5 濃い赤褐色土層
粘性強し。焼土粒子・炭化材・炭化粒子を多量に含む。
- 6 褐色土層
粘性やや強し。ローム粒子・ロームブロック・パミス小・炭化材を多量に含む。人為的埋土。
- 7 褐色土層
粘性強し。粘土粒子を多量に、焼土粒子と炭化粒子を微量含む。
- 8 灰褐色土層
粘性強し。粘土主体。焼土粒子を少量含む。
- 9 赤褐色土層
粘性やや強し。焼土主体。
- 10 暗赤灰色土層
粘性やや強し。焼土粒子・ローム粒子・パミス小・炭化粒子を多量に含む。
- 11 灰黄褐色土層
粘性強し。粘土主体。ローム粒子を微量含む。



0 (1:30) 1m

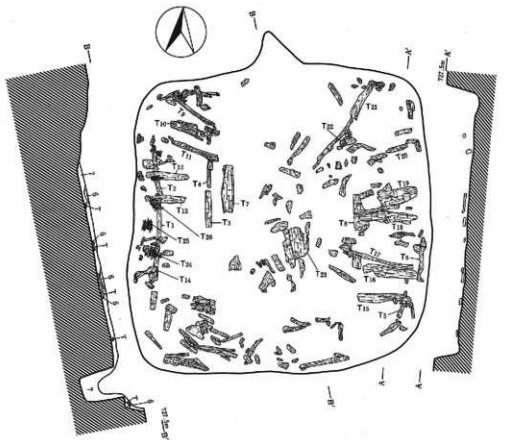
第122図 H 2号住居址カマド実測図



第13図 H2号住居址カマダ遺物出土状況案測図

cmで深さ56cm、P₃は径41cm×34cmで深さ61cm、P₄は径32cm×37cmで深さ62cmを測る。主たる柱間はP₂—P₃で233cm、P₃—P₄で230cmを測る。なおP₁は炭化材を伴う径14cmの、P₂は径13cmの柱痕が検出された。P₅は径32cm×24cmで深さ12cm、P₆は径28cm×21cmで深さ9cm、P₇は径11cmで深さ9cm、P₈は径11cmで深さ9cmを測る。P₉は主柱穴P₄の北方、P₆は住居址中央で検出され、補助的な柱のビットと考えられるが、積極的に肯定はできない。またP₇は東側の周溝の中央部、P₈は西側の周溝の中央部で検出され、補助的な柱に伴うビットと想定される。P₉は径61cm×30cmで深さ17cm、P₁₀は径58cm×36cmで深さ43cmを測り、入口の施設に伴うビットと想定される。P₁₁は径54cm×81cmで深さ58cmを測り、貯蔵穴と考えられる。またP₁₂は径66cm×38cmで深さ9cmを測り、貯蔵穴と想定される。

カマダは北壁中央より検出された。残存状況は、天井石の東側が袖石より外れる他は完全な形

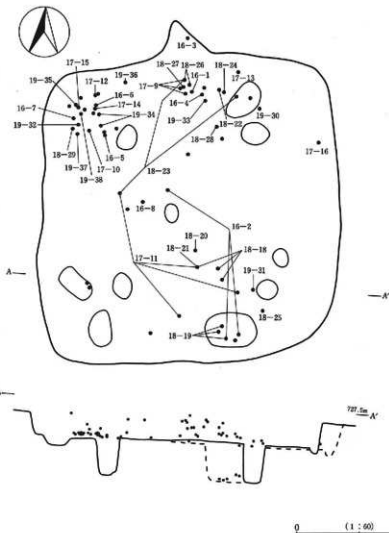


- 6 赤褐色土層 粘性やや強し。炭化粒子を少量含む。焼土主体。
 7 褐色土層 粘性やや強し。ローム粒子・ロームブロック・パミス小・炭化材を多量に含む。人為的埋土。

0 (1:60) 2m

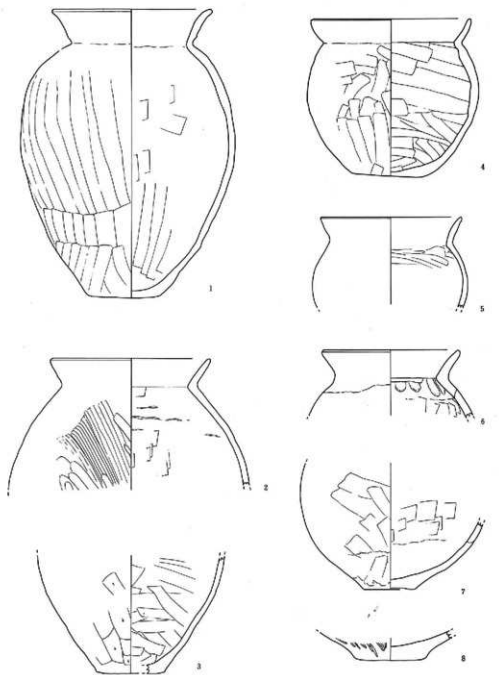
第14図 H2号住居址炭化材分布図

であった。規模は、焚口より煙道部まで198cm、袖部の巾97cmを測る。東側の袖は、長さ66cm・巾約38cm・高さ38cm～25cm、西側の袖は、長さ82cm・巾約36cm・高さ38cm～24cmを測る。両袖には、東側が30.5cm・西側が26cmの長さの面取加工を行った安山岩が埋め込まれている。天井石は安山岩製で、長さ48cm・巾28cm・厚さ8cm～10cmを測り、東側が袖石よりずり落ちた状態で確認された。また径10cm×12cmの煙道が完存していた。覆土は9層に分割された。第1層は粘性がやや強く、ローム粒子と炭化粒子を微量に含む黒色土、第2層は粘性がやや弱く、ローム粒子を少量・炭化粒子を微量含む黒褐色土、第3層は粘性が強く、粘土粒子を多量に・焼土粒子を少量含む褐



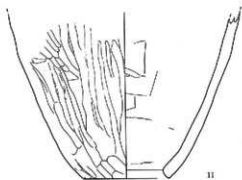
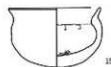
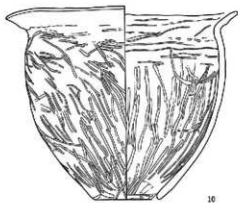
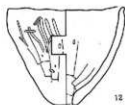
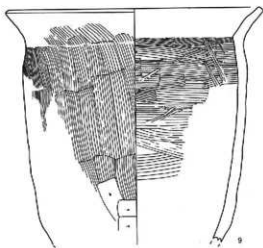
第15図 H 2号住居址遺物分布図

灰色土、第4層は粘性が強く、粘土粒子と焼土粒子を多量に、ローム粒子を微量含む灰褐色土、第5層は粘性が強く、焼土粒子・炭化材・炭化粒子を多量に含むにぶい赤褐色土、第6層は粘性がやや強く、ローム粒子・ロームブロック・パミス小・炭化材を多量に含む褐色土、第7層は粘性が強く、粘土粒子を多量に、焼土粒子と炭化粒子を微量含む褐色土、第8層は粘性が強く、焼土粒子を少量含む粘土主体の灰褐色土、第9層は焼土主体の赤褐色土である。なお第1層は住居址覆土第3層に、第2層は第5層に、第6層は第7層に対応する。カマドの各部の構築状況は以下のとおりである。煙道の天井部は、甔の大型破片を補強材として利用し、第11層の粘性が強



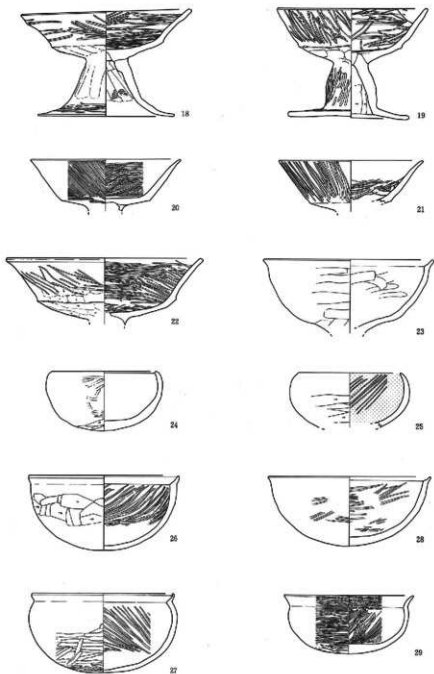
0 (1:4) 5cm

第16图 H 2号住居址出土器物实测图

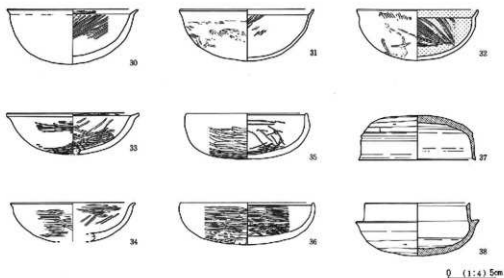


0 (1:4) 5cm

第17图 H 2号住居址出土器物实测图



第18图 H 2 号住居址出土遗物实测图



第19図 H2号住居址出土遺物実測図

第4表 H2号住居址出土遺物一覽表(1)

押出番号	器種	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	備考
16-1	甕	口径(16.6) 底径 7.9 器高 30.6 胴径 22.7	胴中央よりやや上に最大径を持ち、頸部で集約され外彎気味に外傾する	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内外面ヘラナデ	7.5YR4/6
16-2	甕	口径 16.0 現高 13.9	球胴より頸部で集約され、直線的に外傾する口縁に至る	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面ヘケム後ヘラナデ 胴部内面ヘラナデ	7.5YR5/6
16-3	甕	底径(7.2) 現高 12.5	丸味を帯びた底部より内彎気味に外傾する	胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	7.5YR6/4
16-4	甕	口径 16.5 器高 16.7 底径 8.0 胴径 18.1	胴部中央よりやや上に最大径を持ち、口縁は内彎気味に外傾する	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内外面ヘラナデ	5YR4/6-5/2
16-5	甕	口径 14.7 現高 9.6 胴径 16.4	最大径を持つ球胴から、直線的に外傾する口縁に至る	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面単位不明脈なヘラナデ 胴部内面ヘラナデ	10YR5/6
16-6	甕	口径 14.2 現高 7.1	頸部で「く」の字に折れ外傾する口縁に至る	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面ナデ 頸部内面指頭オサエ 胴部内面ヘラナデ	2.5YR6/4
16-7	甕	底径 5.5 現高 13.3	上げ底より球胴部に至る	胴部内外面ヘラナデ	5YR5/6

第5表 H2号住居址出土遺物一覧表(2)

種別 番号	器種	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	備考
16-8	壺	底径 6.5 現高 2.4	底部平底	外部ヘラナゲ後ヘラミガキ 内面ヘラナゲ	10YR6/2
17-9	甗	口径(27.4) 現高 24.9	長胴より最大径を持つ口縁に至る	胴上半部外面ハケメ 胴下半部内面ハケメ後ヘラケズリ 胴部内面ハケメ・ヘラミガキ	7.5YR6/6
17-10	甗	口径 14.6 口径 7.6 器高 20.5	内彎して外傾する胴部から鋭く外反する口縁に至る 口縁部大きくゆがむ	口縁部内外面ヨコナゲの後ヘラミガキ 胴部外面ヘラミガキ 胴部内面ハケメ後ヘラミガキ	7.5YR6/4
17-11	甗	口径(9.0) 現高 17.6	やや内彎気味に外傾する	外面ヘラミガキ 内面ヘラナゲ	5YR5/3
17-12	小型甗	乳内径 1.6 乳外径 2.7 口径 12.1 器高 10.3	やや内彎気味に外傾し、短く外反する口縁に至る 頸部にくびれを持たない	外面ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面ヘラナゲ 内外面3ヶ所にもみ痕	10YR4/4
17-13	甗	口径 6.9 現高 10.1 胴径 12.7	胴中央部で大きく張り出し、口縁部直線的にやや外傾する	外面ヘラミガキ 口縁部内面ヘラミガキ 頸部内面指痕ナゲ 胴部内面ヘラナゲ	2.5YR5/6
17-14	小型壺	口径 7.8 器高 9.1 胴径 10.1	大底より球胴を経て直線的にやや外傾する口縁に至る	口縁部内外面ヘラナゲ 胴部・底部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナゲ	5YR6/4
17-15	小型壺	口径(9.2) 器高 6.3	大底より球胴を経て直線的に外傾する口縁に至る	口縁部内外面ヨコナゲ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナゲ	2.5YR5/4
17-16	手型	台径 5.4 現高 2.4	台部直線的に開く	内外面指痕ナゲ、オヤエ	5YR5/6
17-17	高杯	口径(17.0) 現高 4.2	杯部の体部下半に外傾を持つ	口辺部内外面ヨコナゲ 杯部外面ヘラナゲ 杯部内面ヘラナゲ・ヘラミガキ	2.5YR4/6
18-18	高杯	口径 17.8 台径 14.5 器高 18.0	脚部ラッパ状に開く 杯部は外傾を持つ	杯部内外面ヨコナゲ 杯下部・脚部外面ヘラケズリ後ヘラツ状工具によるナゲ 脚下部外面ヘラミガキ 脚部内面指痕ナゲ・オヤエ	7.5YR7/4
18-19	高杯	口径 15.9 台径 12.8 器高 11.8	脚部直線的に外傾し内傾を持って開く 杯部は外傾を持つ	杯部内外面ヘラミガキ 杯部外面ヘラケズリ後ナゲ 脚部外面ヘラミガキ 脚部内面ヘラケズリ	5YR6/6
18-20	高杯	口径(15.6) 現高 5.4	杯部直線的に外傾 杯体下部に外傾	杯部内外面ヘラミガキ	7.5YR7/8
18-21	高杯	口径 15.2 現高 5.4	杯部直線的に外傾 杯体下部に外傾	杯部内外面ヘラミガキ	5YR6/6

第6表 H2号住居址出土遺物一覧表(3)

発掘 番号	器種	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	備考
18-22	高坏	口径 20.8 現高 7.1	坏部外壁気味に外傾 坏体下部に外傾	坏部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ 坏体下部外面ヘラケズリ 坏部内面ヘラミガキ	5YR6/6
18-23	高坏	口径 17.8 現高 7.8	坏部内壁気味に外傾 口辺部内縁を持つ	内外面ヘラ状工具によるナデ	2.5YR5/3
18-24	埴	口径 11.0 器高 6.3	丸底より体部・口辺部内彎	体下部・底部外面ヘラケズリ 体部外面ヘラミガキ 体部内面ヘラミガキ?	5YR6/4
18-25	埴	口径(10.6) 現高 5.7	丸底より体部・口辺部内彎	外面不明 内面は右廻り放射状増文風ヘラミガキ、内面黒色	2.5YR4/4
18-26	埴	口径 16.1 器高 7.9	体部内彎、丸底 口辺部内縁を持って内彎	口辺部内外面ヨコナデ 体部・底部外面ヘラケズリ 内面放射状(斜状)ヘラミガキ	5YR6/6
18-27	埴	口径 15.0 器高 8.5	体部内彎・丸底 口辺部内縁を持って内彎して外傾	口辺部内外面ヨコナデ 体部外面ヘラミガキ 内面斜状増文風ヘラミガキ	5YR6/6
18-28	坏	口径(16.9) 器高 7.3	体部内彎・丸底 口辺部内縁を持って内彎して外傾	口辺部内外面ヨコナデ 体部外面ヘラミガキ 底部外面ヘラケズリ 内面ヘラミガキ	7.5YR7/4
18-29	坏	口径 13.6 器高 6.2	体部内彎、丸底 口辺部内縁を持って外反	口辺部内外面ヘラミガキ 体部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ 体部内面放射状増文風ヘラミガキ	7.5YR6/6
19-30	坏	口径 13.9 器高 5.8	体部内彎・丸底 口辺部弱い縁を持って外傾	外面ヘラケズリ後ヘラナデ 口辺部弱い縁を持って外傾 体部内面放射状増文風ヘラミガキ	2.5YR5/6
19-31	坏	口径 14.0 器高 5.5	体部内彎、丸底 口辺部弱い縁を持って内彎し外傾する	口辺部内外面ヨコナデ 体部外面ヘラミガキ	5YR7/4
19-32	坏	口径 12.7 器高 5.4	体部内彎、丸底 口辺部内縁を持ち内彎して外傾	口辺部、体部の外面ヘラミガキ 口辺部内面ヨコナデ 体部内面増文風ヘラミガキ 内面黒色	5YR7/4
19-33	坏	口径(14.0) 現高 4.4	体部内彎、丸底 口辺部内縁を持ち内彎して外傾	内外面ヘラミガキ	7.5YR6/6
19-34	坏	口径(13.0) 現高 4.1	体部内彎、丸底 口辺部外反する	内外面ヘラミガキ	5YR6/6
19-35	坏	口径 12.6 器高 8.5	体部内彎、丸底 口辺部内彎	内外面ヘラミガキ	5YR6/6

第7表 H2号住居址出土遺物一覧表(4)

図号 番号	器種	法 量cm	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
19-36	杯	口径(13.9) 器高 4.5	丸底 体部・口辺部内彎	内外面ヘラミガキ	7.5YR6/6
19-37	蓋 (頸)	口径 12.3 器高 4.7	天井部・体部内彎	天井部回転ヘラケズリ 内外面ロクロコナデ	10YR6/1
19-38	杯 (頸)	口径 11.0 最大 13.1 器高 5.6	体部内彎 口辺部直線的にやや内傾 段状の縁を持つ	底部回転ヘラケズリ 他ロクロコナデ	7.5YR6/1

く、ローム粒子を微量含む粘土主体の灰黄褐色土によって構築される。袖部は明黄褐色ローム層を基礎とし、第11層の灰黄褐色土が貼られている。なお煙道部は體体を巾58cm・長さ55cmの規模で掘り込んでいる。焚口は、第10層の粘性がやや強く、焼土粒子・ローム粒子・バミス小・炭化粒子を多量に含む暗赤褐色土によって数センチ貼られる。なお第10層は住居址の貼床層第8層に対応する。また煙道部と燃焼部は、明黄褐色ローム層をそのまま利用している。第11層が貼られる以前の袖は明黄褐色ローム層を利用し、東側袖が長さ75cm・巾38cm・高さ33cm～18cm、西側袖が長さ66cm・巾30cm・高さ26cm～20cmの規模で造り出されていた。

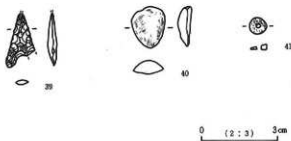
本住居址からは屋根材を中心とした炭化材が多量に出土している。詳細は第14図を参照されたい。T₁～T₈は桁材と考えられ、T₁は182cmの長さが確認された。また、それらに直交するT₉～T₂₁は樞と叉首と考えられる。それらは桁材の上に重って出土している。またT₂₂は主柱でP₁とともに確認された。またT₂₃は棟柱と想定される。T₂₄～T₂₈は、カヤ状の植物で桁材・樞材の上に重って出土している。

遺物は、土師器の甕・甌・鉢・鉢・小型壺・高杯・壺・杯・手捏と須恵器の蓋・杯が出土している。16-1～8は土師器の甕である。16-1はカマドの軽石製支脚石にのった状態で出土している。胴部中央よりやや上に最大径を持ち、内外面にヘラナデが施される。16-2はP₁内と住居址中央より出土している。胴部は球形を呈し、外面に刷毛目調整の後ヘラナデ、内面にヘラナデが施される。16-3はカマド煙道部より出土している。外面に縦位のヘラケズリ、内面に横位のヘラナデが施される。16-4はカマドにかけられた状態で出土している。最大径を持つ球胴と内彎して外傾する口縁部を持ち、胴上部外面に横位の、下部に縦位のヘラナデ、内面に横位のヘラナデが施される。16-5は床面北西部より出土している。胴部は球形を呈し、口縁は外反する。外面に単位不明瞭なヘラ状工具によるナデ、内面に横位のヘラナデが施される。16-6は床面北西部より出土している。胴部の外面に単位不明瞭なヘラ工具によるナデ、内面に横位のヘラナデが施される。16-7は床面北西部より出土している。底部上げ底で胴部は球形を呈する。内外面にヘラ

ナデが施される。16-8は床面中央より出土している。胴下部外面にヘラナデの後縦位のヘラミガキが施される。17-9-12は土師器の甗である。17-9はカマドの煙道の天井部等の構築材として使用されていた。胴部外面に縦位の刷毛目、下部に刷毛目の後ヘラケズリ、内面に横位の刷毛目が施される。17-10は床面北西部より出土している。口縁部は歪みが著しく、胴部は孔部に向かって内彎する。口縁部の内外面にヨコナデの後ヘラミガキ、胴部の内面に刷毛目の後縦位のヘラミガキ、外面に縦位のヘラミガキが施される。17-11は床面に散乱して出土している。孔部より直線的に外傾し、外面に縦位のヘラミガキ、内面にヘラ状工具によるナデが施される。17-12は小型の甗で、床面北西部より出土している。外面にヘラケズリの後ヘラミガキ、内面にヘラナデが施され、内面に2ヶ所・外面に1ヶ所モミ痕が残される。17-13は増でカマドの東側の床面より出土している。胴中央部で大きく張り出し、口縁部は直線的にやや外傾する。口縁部外面に縦位のヘラミガキ、胴上部の外面に縦位の後横位のヘラミガキ、胴中央部以下の外面に横位のヘラミガキが、口縁部の内面に斜位のヘラミガキ、頸部の内面に指頭ナデ、胴部内面に縦位のヘラナデが施される。17-14は床面北西部より出土し、丸底で球胴を呈する。胴部と底部の外面にヘラケズリ、内面にヘラナデが施される。17-15は床面北西部より出土し、丸底で口縁部は直線的に外傾する。胴部の内外面にヘラナデが施される。なお14・15は小型広口壺と認識した。17-16は東側壁の際より出土し、手捏の台部と考えられる。17-17、18-18-23は高坏である。17-17は床面南西部より出土し、坏部の体部に外稜を持つ。坏部の外面にヘラナデ、内面にヘラナデと単位不明のヘラミガキが施される。18-18は住居址の中央やや南側で出土している。脚部は外彎しつつラップ状に開き、坏部は中央に外稜を持つ。坏部の内外面に横位のヘラミガキ、坏体部下半と脚部上半の外面にヘラケズリ後ヘラ状工具によるナデ、脚部下半に横位のヘラミガキ、脚部内面に指頭ナデとオサエが施される。18-19はP₁₁内より出土している。脚部は鋭い内稜を持ってラップ状に開き、坏体部は緩い外稜を持つ。坏部と脚部上半の外面に縦位のヘラミガキ、坏体部下半にヘラケズリ後ヘラ工具によるナデ、坏部の内面に横位と斜位のヘラミガキ、脚部の内面にヘラケズリが施される。18-20は住居址中央より出土している。坏部に鋭い外稜を持ち、坏部外面に斜位のヘラミガキ、外稜付近に横位のヘラミガキ、内面に横位と斜位のヘラミガキが施される。18-21は住居址中央よりやや南側で出土している。坏部外面に縦位のヘラミガキ、内面に横位のヘラミガキが施される。18-22はカマドの東側床面より出土している。緩い外稜を坏部に持ち、脚の接合部以下を欠損している。外面にヘラケズリの後斜位のヘラミガキ、内面に横位のヘラミガキが施される。18-23はP₁₁内とカマド内、住居址中央部付近より出土している。坏部は内彎気味に外傾し、内稜を持って口縁部が内彎しながら短く開き、内外面にヘラ状工具によるナデが施される。18-24-27は土師器の甗である。18-24はカマド東側の床面より出土している。丸底より体部と口辺部が内彎して立ち上がり、体下部と底部外面にヘラケズリ、体部の内面にヘラ

ミガキ、体部の内面に単位不明瞭なヘラミガキが施される。18-25はP₄とP₁₁の中間付近より出土している。丸底より体部と口辺部が内彎して立ち上がり、外面は剝落・磨滅が著しく不明だが、内面は放射状（斜状）の暗文風ヘラミガキが施され、黒色研磨がなされる。18-26はカマドの西側の袖上より出土している。丸底から体部は内彎し、内稜を持って口辺部は内彎気味に外傾する。体部と底部の外面にヘラケズリ、内面に放射状（斜位）のヘラミガキが施される。18-27はカマドの西側の袖にのせられたまま出土している。器形は前者と同じで、体部の外面に横位の、内面に斜位のヘラミガキが施される。18-28・29、19-30-36は土器の坏である。18-28はカマドの東袖の南方床面より出土している。丸底より体部は内彎し、緩い内稜を持って口辺部は内彎気味に外傾し、内外面にヘラミガキが施される。18-29は床面北西部より出土している。丸底より体部は内彎し、内稜を持って口辺部は外反する。体部と口辺部の外面に横位の、口辺部の内面に横位の、体部の内面に斜位のヘラミガキが施される。19-30はP₁₂の東側付近より出土している。丸底より体部は内彎し、緩い内稜を持って口辺部は外反する。外面はヘラケズリの後ヘラ状工具によるナデ、内面は斜位のヘラミガキが施される。19-31はP₂の西側付近より出土している。丸底より体部は内彎して、緩い内稜を持って口辺部は外反し、内外面にヘラミガキが施される。19-32は床面北西部より出土している。丸底より体部は内彎して、内稜を持って口辺部で内彎して外傾する。外面に縦位の、内面に斜位のヘラミガキ、内面に黒色研磨が施される。19-33はカマド東袖の南方床面より出土している。内外面にヘラミガキが施される。19-34は床面北西部より出土している。内外面にヘラミガキが施される。19-35は床面北西部より出土している。丸底より体部と口辺部は内彎し、内外面にヘラミガキが施される。19-36は床面北西部の北壁近くで出土している。丸底より体部と口辺部は内彎し、内外面に横位のヘラミガキが施される。19-37は床面北西部より出土した須恵器の蓋である。天井部に回転ヘラケズリ、他内外面にクロコヨコナデが施される。19-38は床面北西部より出土した須恵器の坏である。20-39は黒曜石の打製石鏝で住居址南西部より出土している。20-40はチャート製の磨石、あるいは玉の未成品と考えられる。貝殻状剝片を利用し、表面に使用擦過痕、あるいは研磨痕が認められる。20-41は緑泥片岩か千枚岩製の白玉で住居址北西部より出土している。

遺物の出土状態については、第15図と第13図を参照されたい。18-27の壺・16-1と16-4の甕はカマドにかけられた状態で出土している。16-5・6・7の甕、17-10・12の甕、17-14・15の小型甕、18-29と19-32・35・36の坏、19-37の須恵器蓋、19-38の須恵器坏は、住居址北西部の床面より集中的に出土している。なお須恵器の蓋と坏はセットである。また住居址南側の貯蔵穴（P₁₁）の底面からは、16-2の甕と18-19の高坏、他図示できなかった甕が出土している。なお北西集簡所の土器群は重っているものが多く、レベルの高い地点でも床面出土として認識した。また炭化材との関係は、土器群の上で炭化材が出土していることより、床→土器→炭



第20図 H2号住居址出土遺物実測図

化材→土砂、床→土器→土砂→炭化材の図式が成り立つ。なお土器群はそのほとんどが熱を受けて変色している。

本住居址は焼失したものである。以上より考えられることは次のとおりである。炭化材は床面直上のものもあるがそのほ

第8表 H2号住居址出土石器一覧表

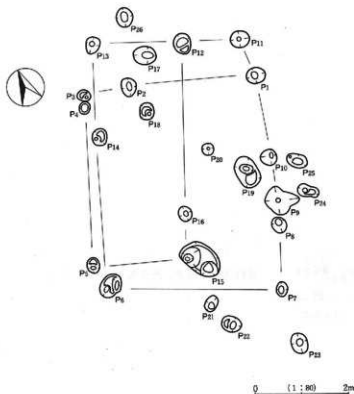
検出番号	器種	原材	法量cm			備考
			長さ	巾	厚さ	
20-39	石器	黒曜石	<2.1>	<0.7>	0.4	凹基無基縁、刃部鋸歯状 先端部・脚部切痕
20-40	磨石	チャート	1.6	1.3	0.5	玉の未成品の可能性もあり 表面に使用擦過痕
20-41	白玉	緑泥片岩 千枚岩	0.65×0.6		0.2	孔径0.18cm 表面に研磨痕

とんどが第7層より出土している。さらに炭化材の上下に焼土層が認められることと、床直上の土器の上に重なっていることを考えると、故意に火をつけて土砂で消火した場合と、失火の際の消火のために土砂を投げ入れた場合の二通りが考えられる。ただし、完形の土器、カマドにかけられていた土器の内部より炭化米等の炭化物が認められないことから、前者の可能性が強いが、断定は避けたい。

以上より本住居址は、古墳時代後期前葉に位置付けられる。

2 掘立柱建物址

1) F1号掘立柱建物址



第21図 F1号掘立柱建物址実測図

F1号掘立柱建物址は、調査区中央、け～さ6～7グリッド内に位置し、全体層序第七層上面においてH2号住居址と近接して検出された。

本址は2間×2間(256cm×156cm)の掘立柱建物址である。主たる柱間は、P₁～P₂で133cm、P₃～P₅で181cm、P₁₄～P₆で160cm、P₆～P₇で184cm、P₇～P₈で73cm、P₁₀～P₁で86cmを測る。主軸方位は、P₃～P₅とP₁₃～P₁₄～P₆の柱列を基本としてN-22°-Eを指す。

P₁は径40cm×33cmで深さ18cm、P₂は径37cm×33cmで深さ18cm、P₃は径30cm×74cmで深さ13cm、P₄は径23cm×26cmで深さ7cm、P₅は径26cm×34cmで深さ11cm、P₆は径54cm×41cmで深さ16cm、P₇は径24cm×32cmで深さ7cm、P₈は径30cm×35cmで深さ13cm、P₉は径60cm×72cmで深さ25cm、P₁₀は径35cm×36cmで深さ16cm、P₁₁は径34cm×40cmで深さ15cm、P₁₂は径44cm×36cmで深さ16cm、P₁₃は径37cm×30cmで深さ14cm、P₁₄は径35cm×34cmで深さ17cm、P₁₅は径92cm×59cmで深

さ18cm、P₁₆は径34cm×27cmで深さ16cm、P₁₇は径40cm×49cmで深さ21cm、P₁₈は径37cm×31cmで深さ16cm、P₁₉は径69cm×46cmで深さ22cm、P₂₀は径26cm×24cmで深さ11cm、P₂₁は径26cm×34cmで深さ10cm、P₂₂は径42cm×33cmで深さ16cm、P₂₃は径44cm×36cmで深さ14cm、P₂₄は径44cm×24cmで深さ17cm、P₂₅は径44cm×30cmで深さ15cm、P₂₆は径42cm×36cmで深さ9cmを測る。

遺物は出土しなかった。

本建物址の所産期は不明である。

3 土坑

1) D1号土坑



1 暗褐色土層 粘性やや弱し、パミス小とローム粒子を少量含む。

第22図 D1号土坑実測図

D1号土坑は、調査地中央よりやや南側、き-4グリッド内に位置し、全体層序第VI層中において検出され、H1号住居址を破壊している。

規模は長軸（南北）が68cm、短軸が52cmを測り、長軸方位はN-2°-Eを指す。

遺物は出土せず、所産期は不明である。

2) D2号土坑

D2号土坑は、調査地中央よりやや南側、き-5グリッド内に位置し、全体層序第VI層中において検出され、H1号住居址を破壊している。

規模は長軸が77cm、短軸が43cm、深さ8cmを測り、楕円形を呈する。長軸方位はN-1°-Eを指す。

遺物は出土せず所産期は不明である。



1 暗褐色土層 パミス小とローム粒子を少量含む。

第23図 D2号・D3号・D4号土坑実測図

3) D3号土坑

D3号土坑は、調査区中央よりやや南側、き-5グリッド内に位置し、全

体層序第VI層中において検出され、H1号住居址を破壊している。

規模は長軸86cm、短軸48cm、深さ6.5cmを測り、楕円形を呈する。長軸方位はW-15°-Nを指す。

遺物は出土せず、所産期は不明である。

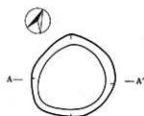
4) D4号土坑

D4号土坑は、調査区中央よりやや南側、きー5グリッド内に位置し、全体層序第VI層中において検出され、H1号住居址を破壊している。

規模は、長軸が110cm、短軸が37cm、深さ8cmを測り、不整楕円形を呈する。長軸方位はN-32°-Wを指す。ピットは2個を有し、P₁は径20cm×17cmで深さ5cm、P₂は径25cm×12cmで深さ4cmを測る。また、壁外に2個のピットを有し、P₃は径24cm×30cmで深さ20.5cm、P₄は径25cm×30cmで深さ13cmを測る。P₃・P₄は本土坑のP₁・P₂と関連のある可能性が高い。

遺物は出土せず、所産期は不明である。

5) D5号土坑



- 1 黒褐色土層 粘性やや強し。パミス小とローム粒子を微量含む。
2 黒褐色土層 粘性強し。パミス小とローム粒子・炭化粒子を微量含む。

0 (1:60) 1m

第24図 D5号土坑実測図



0 (1:4) 5cm

第25図 D5号土坑出土遺物実測図

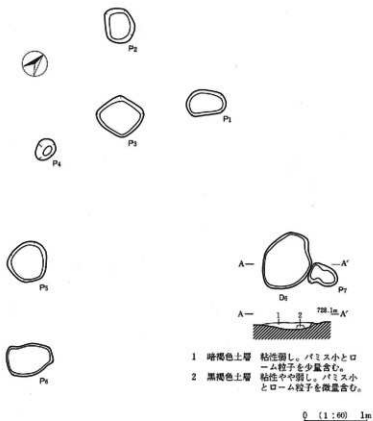
D5号土坑は、調査区の中央、く・け-4グリッド内に位置し、全体層序第VII層上面において、単独で検出された。

規模は、径132cm×130cmで深さ29.5cmを

測り、円形を呈する。

遺物は、土師器の甕(25-1)が出土している。口縁部は頸部より緩く外反し、口縁部の内外面にヨコナデ、胴上部にヘラ状工具によるナデの後ヘラミガキ、内面に単位不明瞭なヘラ状工具によるナデが施される。

以上より本土坑は、古墳時代を所産期とする可能性が高い。



第26図 D6号土坑およびピット群夫測図

6) D6号土坑

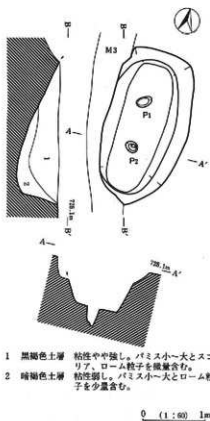
D6号土坑は、調査区の南側、お-3グリッド内に位置し、全体層序第VII層上面において検出され、M1号溝状遺構を破壊している。

規模は、長軸が98cm、短軸が76cm、深さ11.5cmを測り、楕円形を呈する。長軸方位はN-2°-Wを指す。

遺物は出土せず、所産期は不明である。

7) D7号土坑

D7号土坑は、調査区中央よりやや北側、こ-5・6グリッド内に位置し、全体層序第VII層上面において検出され、東側をM3号溝状遺構によって破壊される。



- 1 黒褐色土層 粘性やや強し。バミス小〜大とスコリア、ローム粒子を微量含む。
 2 暗褐色土層 粘性弱し。バミス小〜大とローム粒子を少量含む。

第27図 D7号土坑実測図

4 ピット群

ピット群は、調査区の南側、えーおー2〜4グリッド内に位置し、全体層序第VII層上面において検出された。

比較的規則性のある配置が窺われ、ピット群として扱った。また耕作物の根による攪乱の可能性もある。

P₁は径39cm×62cmで深さ17.5cm、P₂は径55cm×46cmで深さ6cm、P₃は径65cm×75cmで深さ8cm、P₄は径37cm×29cmで深さ13.5cm、P₅は径66cm×60cmで深さ15cm、P₆は径50cm×73cmで深さ13cm、P₇は径31cm×44cmで深さ12cmを測る。ほとんどのピットが円形ないしは楕円形を呈する。

遺物は出土せず、所産期は不明である。

規模は現存値で、長軸が244cm、短軸133cm、深さ80cmを測り、長楕円形を呈する。また床面の規模は、長軸が206cm、短軸が71cmを測り、同様に長楕円形を呈する。長軸方位は、床面を基本としてN-1°-Eを指す。

覆土は2層に分割された。第1層は粘性がやや強く、バミス小〜大(径10mm以下)とスコリア・ローム粒子を微量含む黒褐色土、第2層は粘性が弱く、バミス小〜大とローム粒子を少量含む暗褐色土である。

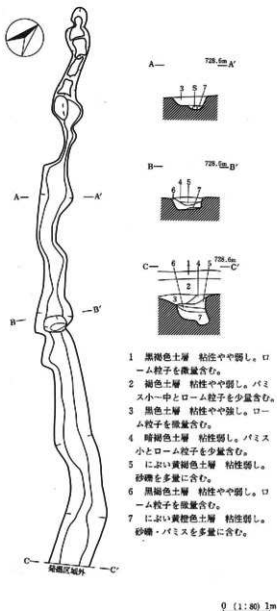
ピットは床面長軸線上に2個検出された。P₁は径15cm×25cmで深さ38cm、P₂は径17cm×19cmで深さ30cmを測り、P₂は床面下23.5cmの所にテラスを有している。

遺物は出土しなかった。

以上形態等より、縄文時代の落し穴状土坑と考えられる。

5 溝状遺構

1) M1号溝状遺構



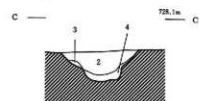
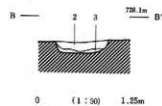
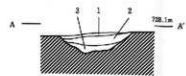
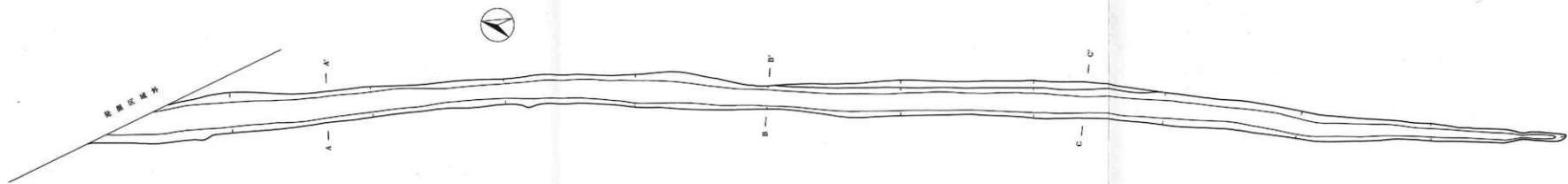
第28図 M1号溝状遺構実測図

M1号溝状遺構は、調査区の南側、えー1・2、おー2・3グリッド内に位置し、全体層序第Ⅶ層上面において検出され、D6号土坑によって破壊される。

規模は、全長11.8m、最大巾86cmを測り、北西より南東方向に向かってレベルを低下させている。断面は基本的に「U」字形を呈しているが、底面の凹凸は激しく、大小の礫（主として軽石）がかなり多く見られた。

覆土はC-C'面で5層に分割された。図中では第3層以下第7層までが覆土である。第3層は粘性がやや強く、ローム粒子を微量含む黒色土、第4層は粘性が弱く、パミス小とローム粒子を少量含む暗褐色土、第5層は粘性が弱く、砂礫を多量に含むぶい黄褐色土、第6層は粘性がやや弱く、ローム粒子を微量含む黒褐色土、第7層は粘性が弱く、砂礫とパミスを多量に含むぶい黄褐色土である。なお、第1層は全体層序第Ⅰ層に、第2層は第Ⅴ層に対応する。

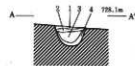
なお南西部は発掘調査区域外



第29回 M2号溝状遺構実測図

- 1 褐色土層 粘性弱し。ローム粒子を少量含む。
- 2 暗褐色土層 粘性弱し。ローム粒子・砂粒を少量含む。
- 3 暗褐色土層 粘性弱し。ローム粒子・パリスを微量、砂粒を少量含む。
- 4 濃い黄褐色土層 粘性弱し。ローム粒子・パリス・砂粒を多く含む。

0 (1:100) 2.5m



- 1 黄褐色土層 粘性弱し。パリス小・砂粒・ローム粒子を多く含む。
- 2 褐色土層 粘性弱し。砂粒・ローム粒子を少量含む。
- 3 黒褐色土層 粘性やや弱し。パリス・ローム粒子を微量含む。
- 4 濃い黄褐色土層 粘性弱し。ローム粒子・砂粒を多く含む。

0 (1:50) 2.5m

第30回 M3号溝状遺構実測図

0 (1:100) 1.25m

であるが、田切地形の断崖となっており、ここより本遺構は水を落下させていたと考えられる。

遺物は出土されず、所産期は不明である。

2) M2号溝状遺構

M2号溝状遺構は、調査区の中央をほぼ南北に横切り、えーけー5、くーしー6グリッド内に位置する。また全体層序第III層中において検出され、M3号溝状遺構とH1号住居址を破壊している。

規模は、全長43.6m(現存値)で最大巾68cmを測り、北より南方に向かってレベルを低下させている。断面形状は主として「U」字形を呈し、壁面・床面ともに平滑である。また礫は見られず、大小パミスが見られる程度である。

覆土は全体で4層に分割された。第1層は粘性が弱く、ローム粒子を微量含む褐色土、第2層は粘性が弱く、ローム粒子と砂粒を少量含む暗褐色土、第3層は粘性が弱く、ローム粒子とパミス・砂粒を少量含む暗褐色土、第4層は粘性が弱く、ローム粒子とパミス・砂粒を多く含む^{ぶい}黄褐色土である。

本遺構の勾配は、かなり緩やかで、勾配のきつくなる東西方向を避けて南北に走らせている。つまり人為的に南北方向に造られた溝と考えられる。

遺物は出土せず、所産期は不明である。

3) M3号溝状遺構

M3号溝状遺構は、調査区の中央をほぼ南北に横切り、きーさー5・けーさー6グリッド内に位置する。また全体層序第IV層中において検出され、D7号土坑とH1号住居址を破壊し、M3号溝状遺構に破壊される。

規模は、全長20.8m(現存値)で最大巾52cmを測り、北より南方に向かってレベルを低下させている。断面形状は「U」字形を呈し、壁面・床面ともに比較的平滑である。また礫は見られず、底面に径10mm以下のパミスが見られるのみである。

覆土は全体で4層に分割された。第1層は粘性が弱く、パミス小と砂粒・ローム粒子を多く含む黄褐色土、第2層は粘性が弱く、砂粒とローム粒子を少量含む褐色土、第3層は粘性がやや弱く、パミスとローム粒子を微量含む黒褐色土、第4層は粘性が弱く、ローム粒子と砂粒を多く含む^{ぶい}黄褐色土である。

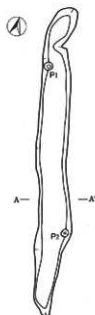
本遺構の勾配もM2号溝状遺構と同様に、かなり緩やかで、勾配のきつくなる東西方向を意識

的に避けて、南北方向へ走らせている。つまり、水の流れ易い東西方向を避けて、南北方向に人為的に造られた溝と考えられる。

遺物は、図示を控えたが第1層上面より土師器の坏の破片が出土している。

なお本遺構の所産期は不明である。

4) M4号溝状遺構



1 暗褐色土層 粘性やや弱し、バミス・ローム粒子を少量含む。

0 (1:800) 1m

第31図 M4号溝状遺構実測図

M4号溝状遺構は、調査区の中央、か・き-4、き・く-5グリッド内に位置し、全体層序第VI層中において検出され、H1号住居址を破壊する。

規模は、全長6.48m、最大巾74cmを測る。床面は不規則な凹凸が見られ、やや柔軟である。

覆土は、粘性がやや弱く、バミスとローム粒子を少量含む暗褐色土の1層のみが確認された。

ピットは2個が認められた。P₁は径17cm×24cmで深さ13cm、P₂は径17cm×15cmで深さ4cmを測る。

本遺構は勾配がなく、底面はほぼ水平に掘り込まれており、水の流れた痕跡は認められなかった。

遺物は出土せず、所産期は不明である。

5) M5号溝状遺構

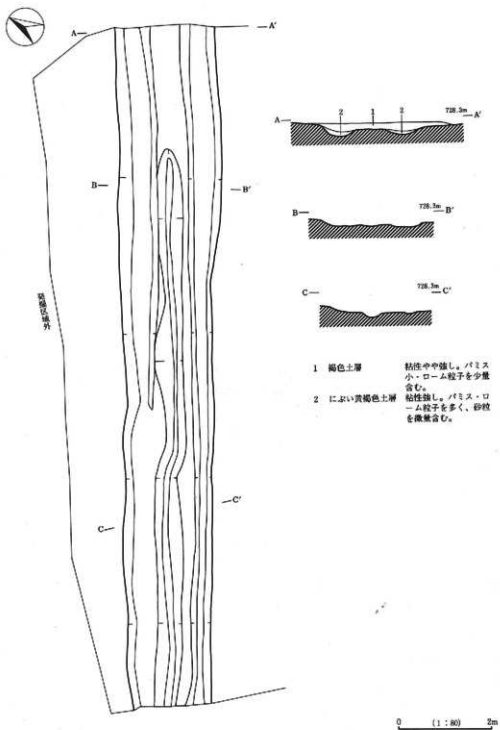
M5号溝状遺構は、調査地の北側、す-10・11、せ-8-10、そ-8・9グリッド内に位置し、全体層序第III層上面において検出された。

規模は現況で、長さ14.48m、最大巾2.16mを測る。レベルは地形なりに、北東から南西方向に向かって低下している。

覆土は2層に分割された。第1層は粘性がやや強く、バミス小とローム粒子を少量含む褐色土、第2層は粘性が強く、バミス・ローム粒子を多く、砂粒を微量含むにぶい黄褐色土である。なお第2層は固くしまっており、使用面の可能性が強い。

以上より本遺構は、道の跡と考えられる。

遺物は出土せず、所産期は不明である。



第32図 M5号溝状遺構実測図

第V章 総括

芝宮遺跡群下芝宮遺跡から検出された遺構は、古墳時代後期の住居址2軒、時期不明の掘立柱建物址1棟、古墳時代の土坑1基、縄文時代の土坑1基、時期不明の土坑5基、時期不明のピット群1ヶ所、時期不明の溝状遺構5条である。その内、古墳時代後期前葉の焼失住居址であるH2号住居址より良好な土器群が出土しているため、分類を行い、ほぼ同時期と推定される大井城跡H2号住居址と清水田遺跡H1号住居址と比較し、若干の考察を加えたい。

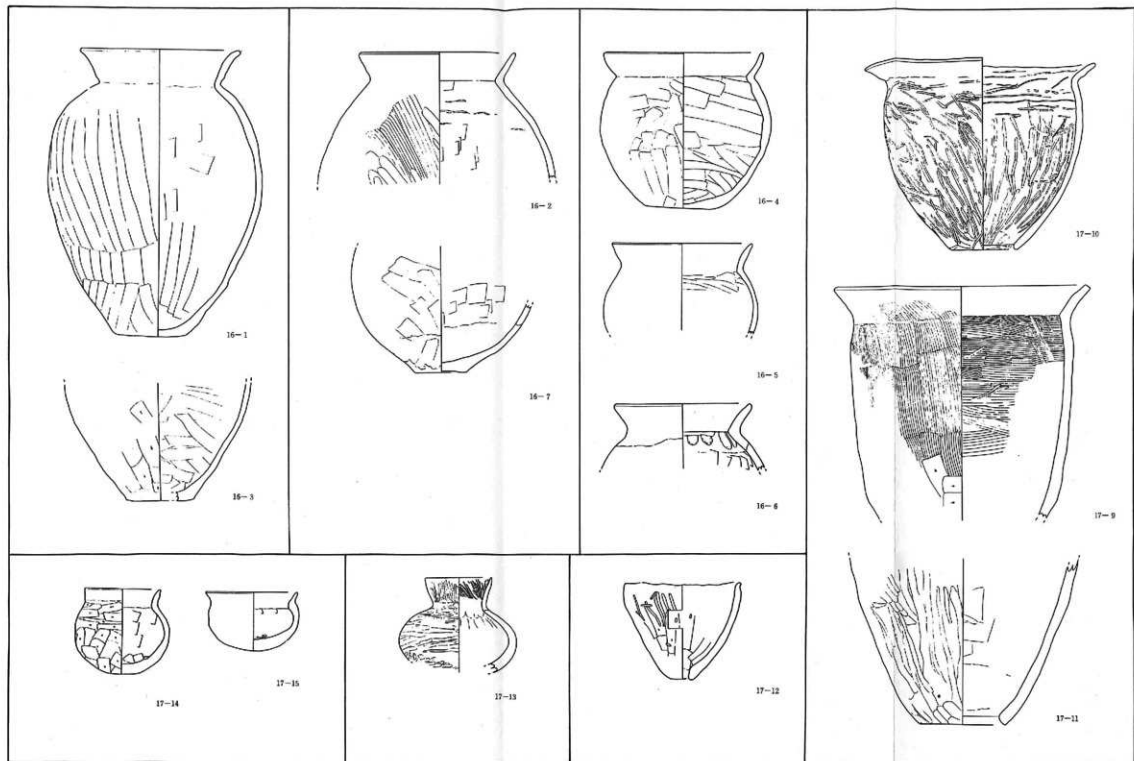
土師器の甕は3大きく3種類に分けられ、さらに5種類に細分される。第1として、丸味を持った長胴甕で最大径を胴部の中央よりやや上に持つもの(16-1・3)である。大井城では35-1、清水田では36-1がこれにあたる。36-1はやや長胴化傾向が窺れる。第2として、胴部が球形を呈するもの(16-2・7)である。大井城では35-2、清水田では36-2がこれにあたる。36-2は口縁部が外反して開くが、他は直線的に開いている。第3として、口縁部が内彎するもの(16-4)である。大井城では35-5・8がこれにあたる。小型と中型の違いはあるが、16-4と35-5は器形的に酷似している。第4として、薄手で球胴を呈するもの(16-5)である。大井城では35-4がこれにあたる。第5として、厚手で球胴を呈するもの(16-6)である。大井城では35-3、清水田では36-5がこれにあたる。

甗は4種類に分けられる。第1として、胴部に丸味を持つもの(17-10)である。大井城では口縁部が短い35-10がこれにあたる。第2として、胴上半部が直線的に立ち上がるもの(17-9)である。大井城では35-9がこれにあたり、より直線的な傾向がある。第3として、胴部が直線的に外傾するもの(17-11)である。清水田では36-4がこれにあたる。第4として小型のもの(17-12)である。大井城では35-11がこれにあたるが、外傾する胴部の角度が違っている。

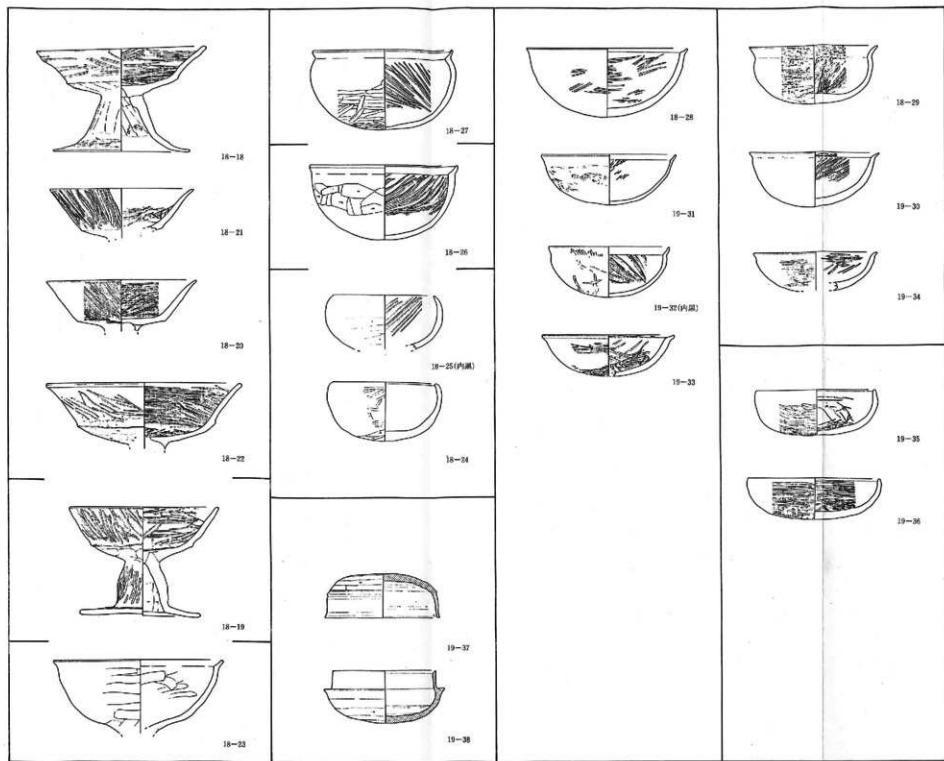
埴は1種類(17-13)のみである。大井城では35-6、清水田では36-6がこれにあたる。17-13、35-6は、36-6に比べやや扁平な胴部である。

小型壺は2種類に分けられる。球胴のもの(17-14)と球胴だが扁平なもの(17-15)である。器種は小型広口壺か小型短頸壺とも呼びたいが、今後の研究を待ちたい。

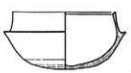
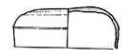
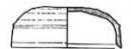
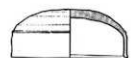
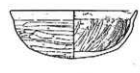
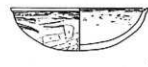
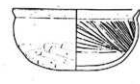
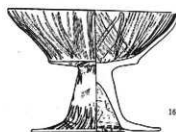
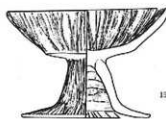
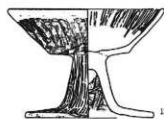
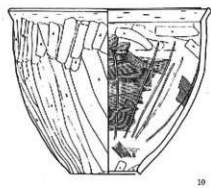
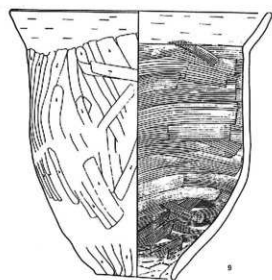
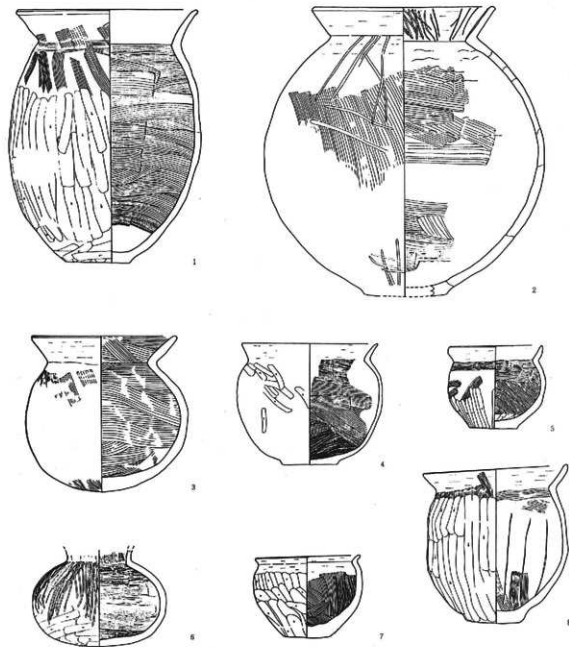
高杯は大きく2種類に、さらに4種類に分けられる。第1として、杯部が外反するもので体部下の外縁が不明瞭なもの(18-18・20)である。さらにこれは脚部に内縁を持たない。第2として、外反するもので体部下の外縁が明瞭なもの、つまり体部外縁以下が口辺と平行に近くなるもの(18-20・21)である。大井城では35-14、清水田では36-7がこれにあたる。第3として、体部が直線的に外傾し、脚部内面に内縁を持つもの(18-19)である。大井城では35-12・13が



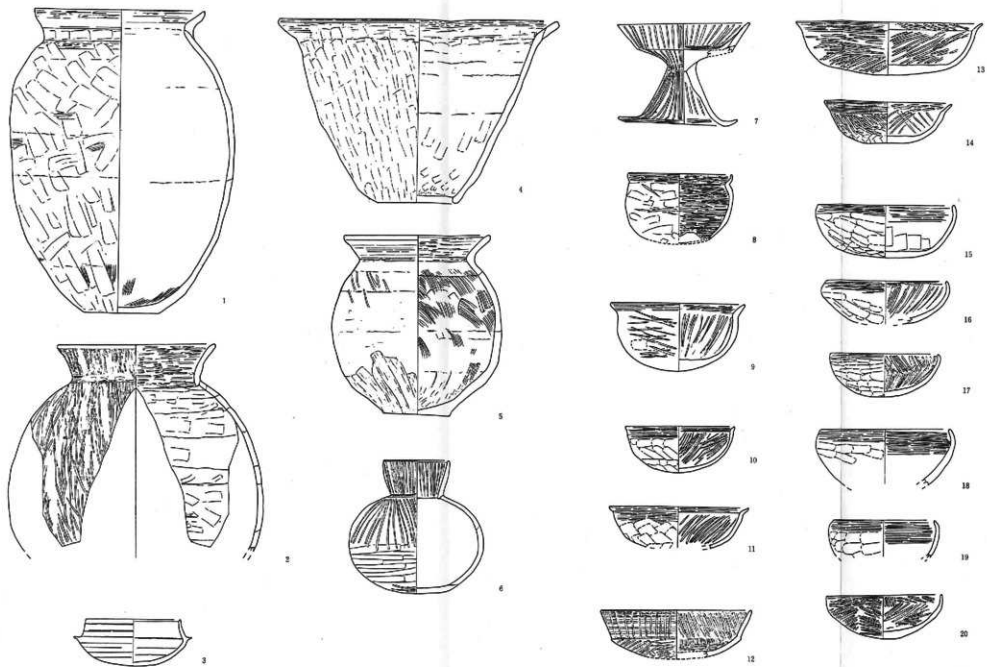
第332圖 下芝宮遺跡B2号住居址出土土器一覽(1)



第34图 下芝官渡路H2号住屋址出土土器一型(2)



第35图 大井城跡H 2号住居址出土土器一覽



第36图 清海田遠陣村1号住居址出土上器一覽

これにあたるが、外稜の明瞭の点では18-19とは異なる。第4として坏が内彎し、口辺で短く折れて開くもの（18-23）である。なお大井城の35-16・15の様に、坏部が内彎し、外稜が明瞭、内稜を有するものは本址にはなかった。

壺は3種類に分けられる。第1として、体部が内彎し、内稜を持ち、さらに口辺部で内彎するもので、胴部に最大径を持つもの（18-27）である。清水田では36-8がこれにあたる。第2として、口辺部に最大径を持つ以外は前者と器形が同じもの（18-26）である。第3として、体部・口辺部ともに内彎するもの（18-24・25）である。なお器高が半径より大きいものを壺として扱った。

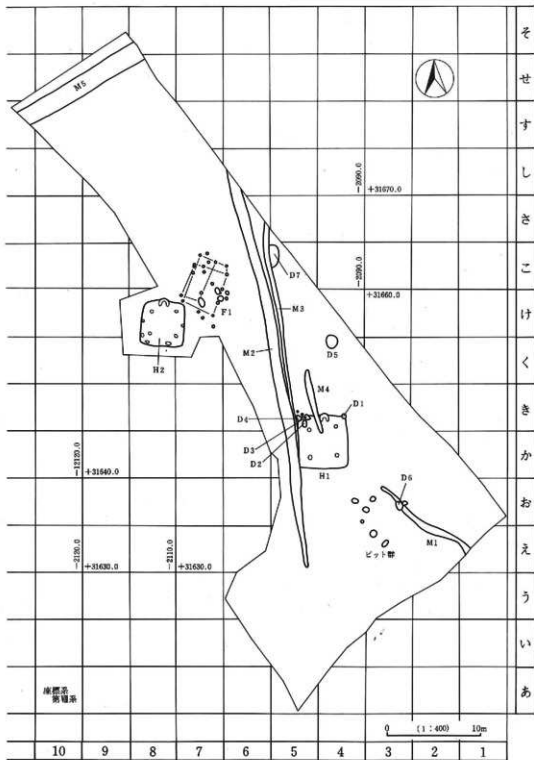
坏は細分を避け、大きく3種類に分けた。第1として体部が内彎し、内稜を持ち、さらに口辺部で内彎するもの（18-28、19-31-33）である。大井城では35-18-21、清水田では36-10・11がこれにあたる。第2として、体部は内彎し、口辺部は外反するもの（18-29-34）である。大井城では35-17、清水田では36-9・13・14がこれにあたる。第3として、体部・口辺部がともに内彎するもの（19-35・36）である。大井城では35-22、清水田では36-15-20がこれにあたる。なお19-12は新しい様相の坏で、本調査で検出されたH1号住居址で3点出土している。また細分については、容量の大小、内彎角度等によってできないことはないが、今後の成果に基づく研究を待ちたい。

須恵器の坏（19-38）と蓋（19-37）は、清水田の36-3よりは、大井城の36-27と36-24・25に類似点が多く認められる。

以上が下芝宮H2号住居址出土土器群を中心とした分類である。ここで若干の考察を試みたい。17-19の甗はカマドの構築材として使われていたものである。少なくとも、本住居址使用時点の土器ではない。つまり本住居址カマド構築直前の土器と言えよう。さらにこの甗は、大井城35-9に酷似している。よって本住居址より大井城35-9は若干先行していると思われる。さらに高坏の外稜と内稜、坏の口辺部の外反化傾向などからもそれは窺える。これらの事より、本遺跡H2号住居址は、清水田遺跡H1号住居址よりも先行し、大井城跡H2号住居址と併行関係、あるいは若干後出すると言えそうである。わかりやすく図式に表すと次の通りである。



最後に、発掘及び整理調査に携わっていただいた方々に、心より感謝の意を表し、厚くお礼申し上げます。（羽毛田）



第37図 下芝宮遺跡全体図 (1:400)

参考文献

- 佐久市教育委員会 1986 『大井城跡』
" 1976 『市道』
" 1975 『三塚町田』
" 1981 『舞台場』
" 1978 『上桜井北』
" 1978 『跡部町田』
" 1981 『芝宮遺跡（第2次）』
" 1980 『清水田』
" 1975 『三塚』
御代田教育委員会 1987 『前田遺跡』
埼玉県埋蔵文化財事業団 1983 『後張』
静岡市教育委員会・清水市教育委員会 1986 『瀬名3号墳』
静岡市教育委員会 1986 『駿河 楠ヶ沢古墳群』
北武蔵古代文化研究会・群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所 1987
【第8回三県シンポジウム 東国における古式須恵器をめぐる諸問題】
静岡県考古学会 1978 『シンポジウム 静岡県における4～5Cの墳墓について』
石野博信 1975 「考古学から見た古代日本の住居」(『日本古代文化の探究 家』)
文化庁 1967 『民家のみかた調べかた』

……他



下芝宮遺跡全景写真（北より）



H 2号住居址、F 1号掘立柱建物址遺景（北より）



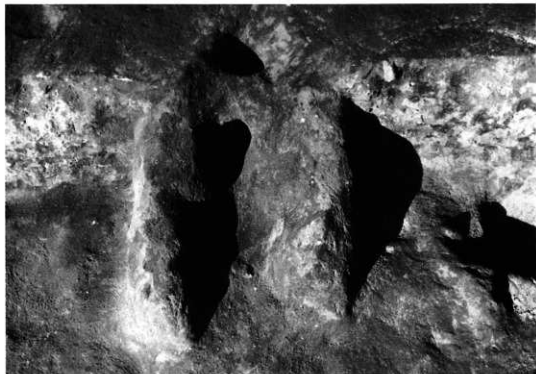
発掘調査団



H1号住居址(南より)



H1号住居址遺物出土状況(南より)



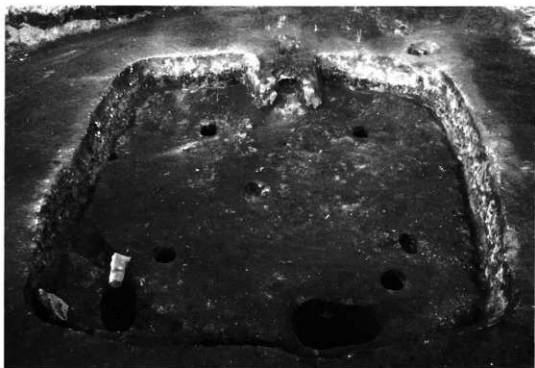
H1号住居址カマド（南より）



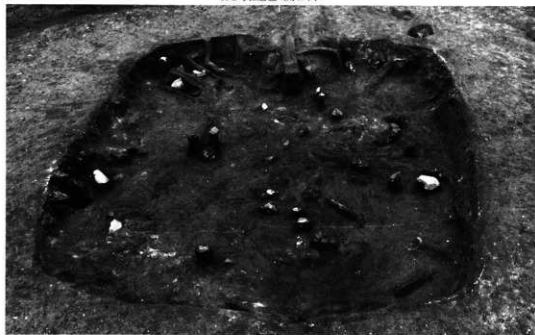
H1号住居址カマド廻り方（南より）



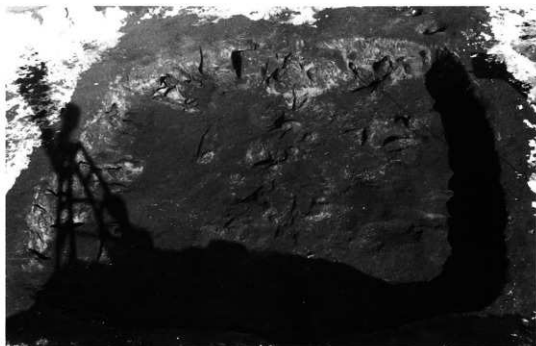
H1号住居址カマド（北より）



H 2号住居址（南より）



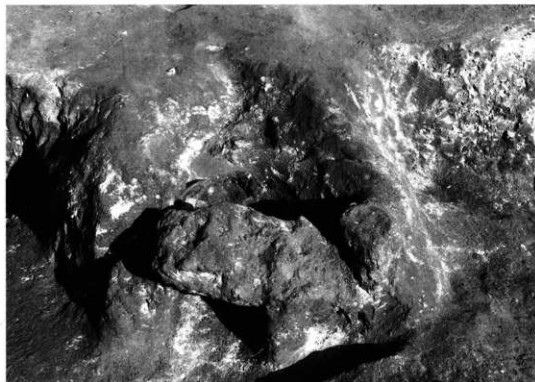
H 2号住居址遺物出土状況（南より）



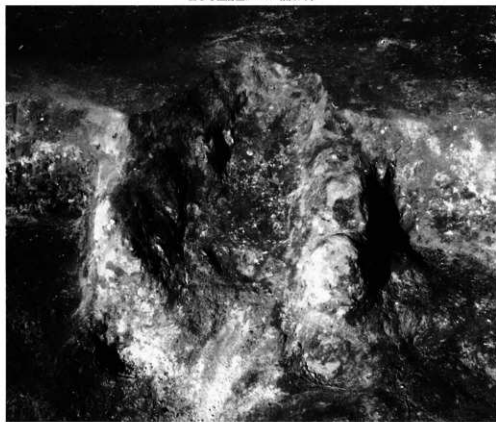
H2号住居址第7層上面（南より）



H2号住居址炭化材出土状況（南より）



H 2号住居址カマド (南より)



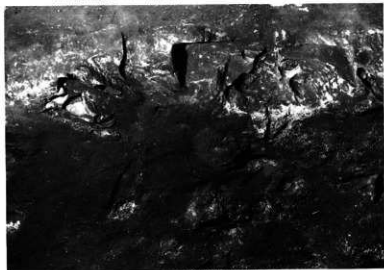
H 2号住居址カマド掘り方 (南より)



H 2 号住居址カマド (南より)



H 2 号住居址カマド (北より)



H 2 号住居址遺物出土状況 (南より)



H 2 号住居址炭化材



H 2 号住居址炭化材出土状況



H 2 号住居址北西部遺物出土状況



H 2 北西部遺物出土状況



H 2 号住居址炭化材出土状況 (東より)



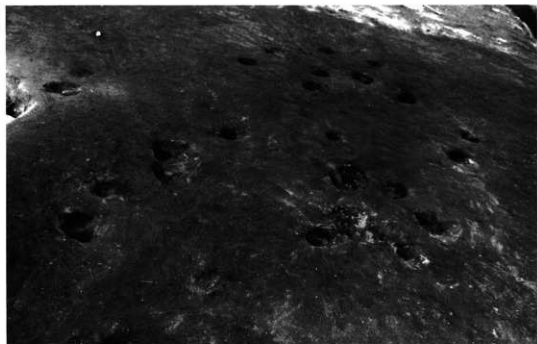
H 2 炭化材



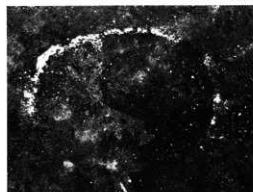
H 2 号住居址カヤ出土状況 (東より)



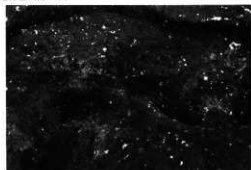
H 2 増出土状態



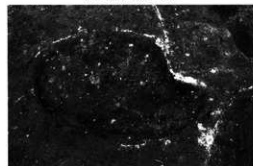
F 1号圓立柱建物址 (南より)



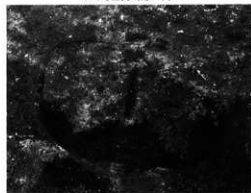
D 1号土坑 (西より)



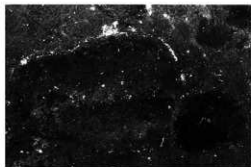
D 4号土坑 (南より)



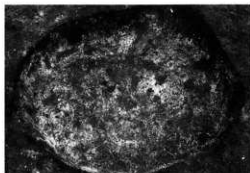
D 2号土坑 (東より)



D 6号土坑 (南より)



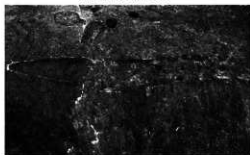
D3号土坑 (北より)



D5号土坑 (南より)



D7号土坑 (東より)



M4号溝状遺構 (東より)



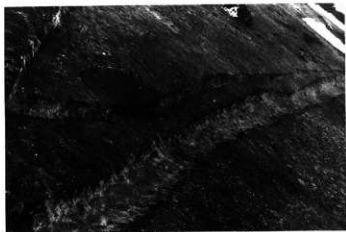
M1号溝状遺構 (西より)



M5号溝状遺構 (南より)



M2号溝状遺構 (北より)



M3号溝状遺構（北より）手前はM3



発掘風景



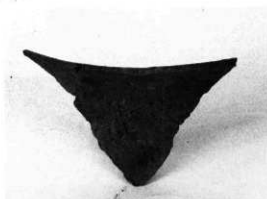
H1 9-2



H1 9-10



H1 9-6



H1 9-1



H1 9-7



H1 9-8



H1 9-9



H1 9-4



H1 10-12



H1 10-13



H1 10-11



整理作業スナップ



H 1 9-3



H 2 カマド遺物出土状況



H 2 16-1



H 2 17-14



H 2 17-15



H 2 17-13



H 2 16-2



H 2 17-10



H 2 16-6



H 2 16-5



H 2 17-16



H 2 出土カヤ



H 2 16-7



H 2 16-3



H 2 16-4



H 2 17-12



H 2 18-24



H 2 17-11



H 2 19-30



H 2 17-9



H 2 19-32



H 2 18-21



H 2 18-22



H 2 18-26



H 2 18-28



H 2 19-31



H 2 18-18



H 2 18-27



H 2 18-19



H 2 19-35



H 2 19-36



H 2 18-23



H 2 20-40, 20-41 (1:1)



H 2 19-37



H 2 19-38



H 2 19-37・38



H 2 19-37・38



H 2 20-39 (1:1)



H 2 遺物出土状況



H 2号住居址出土遺物



発掘風景



H 2号住居址北西部遺物出土状況



整理作業スナップ



発掘風景



H2号住居址炭化材出土状況(南より)

芝宮遺跡群

下芝宮遺跡

長野県佐久市長土呂下芝宮遺跡発掘調査報告書

昭和63年3月

編集者 下芝宮遺跡発掘調査団

発行者 佐久市教育委員会
佐久市大字中込3056
電話0267-62-2111

印刷所 輔佐久印刷所